

訂正
山陽史論鈔

野中元三郎
編

特257
355



始



特 257
355

野中元三郎編

訂正
山陽史論
全少

發行所 東京 富山房



躬偃仰一室而心
 閱百代之失得非
 他已極蓋而憂人
 家國文章滿腹不
 濟平餘曲又通舟別
 所為嗜是物物法
 男兒乎權也夫知無
 念此迂拙者之時共

元元全佳也雙蓮能為 清字今日已為 不有別林 歸



山人畫

二十餘年 成我書 之前 陽山 一撇 於此
 中 幾 個 英 雅 淨 諒 何 色 無 曲 筆 無

外 然 脫 稿 家 也

孫 嘉 書

蹟筆及像肖生先陽山

○山陽先生肖像

畫像ハ門人大雅堂義亮の描く所、賛ハ山陽の自作二首の一、男三樹諱ハ醇の筆、文に曰く、

躬、偃仰一室、而心關百代之失得、弗恤己、鹽齏、而憂人、家國、文章滿腹、不濟乎饑、曲尺、直尋、則所不爲、噫、是何物、迂拙男兒乎、雖然、烏知無下念、此、迂拙者、之時上哉、

右先人畫像、自贊、謹錄、爲清華金田兄囑、不肖頼醇

○山陽先生筆蹟

二十餘年成我書

書前酌酒一掀鬚

此、中幾個英雄漢

諒得吾無曲筆無

外史脫稿戲作

頼襄

正訂 山陽史論鈔序

思想善導

我が國、目下の急務は、思想善導を以ては他にあるまい。思想善

導の第一は、尊王愛國の念を養ふの他はあるまい。

抑も山陽の懐ける燃ゆるが如き尊王論は、日本外史、日本政記の上

でその鋭利なる筆鋒によつて四海に宣傳せられ、遂に明治維新の

大業を助成した。日本外史が徳川幕府から没收の厄を免れたの

は、寧ろ奇異の感じがする。此に於て予は樂翁公が衆議を排し、外

史を以て公正の論と認め、却つてその公行を懲通せられたのは、公

の見識が極めて公明であつたことに敬意を拂はざるを得ない。

且つ山陽は尊王家であると共に、又大きな民本主義者である。さ

ればその所論の古今を通じて用ひらるべき妥當のものであるこ

とを疑はない。

回顧するに、明治維新前後から、明治二十年頃までは、普通の教育を

山陽の尊王論

明治維新の大業と山陽の尊王論

樂翁公の公明

山陽の民本主義

外史政記は昔の必讀書

序

今日の終局

山陽史論鈔の發行

百年祭記念訂正

本書の特色

受けた者は、日本外史は勿論、少し進んでは日本政記までも必ず通讀して居た。これがために、當時の人々は尊王愛國の念厚く、成敗得失の理に通じ、堅固の志操と社會的常識とを有することが、今日よりも深かつた。今や漢文の教科書中には、此種の教材が缺乏し、山陽の論文も僅に一二に止まるのは、甚だ遺憾のことである。

此に於て予は去る大正十四年、日本外史、日本政記中、現今國民として必讀すべきものを選び、山陽史論鈔一卷を編して、試みに中等學校上級用の漢文副讀本に充てたのであるが、思ひの外大方の賛成を得たので、之に酬ゆる必要もあり、且つ時代の變遷により、その體裁等に改良すべき點もあり、時恰も山陽先生の百年祭をひかへ、聊か記念の意味をも加へて、之を訂正しその完成を企てたのである。さて訂正せられた本書の特色を擧ぐれば、

一、思想文辭兩方面から適切なものを選択し、政記の論文九十二の中四十四を採り、外史の論文十八の中十六を收め、一章中でも、

不適當の所は、原文の趣旨と文章の價値を損しないやう巧に刪正（せんせい）を加へたこと。

一、日本歴史の大體が知られるやう、材料の選擇に意を用ひて、議論の外に歴史から得られる國民思想の涵養（くわんやう）に留意したこと。

一、拙著論語選孟子選にならひ、正副二鈔（政記四十四章中副鈔十四章、外史十六章中副鈔五章）に分ち、大小活字で區別し、時間の乏しき場合、又は程度の低き場合には正鈔のみを課し、之に反せる場合は、正鈔の外に副鈔の全部又はその一部を選びて課する便に供したこと。

一、篇内六章に模範訓點を施したのは、上級用教科書は、訓點が省略してあるため、往往にして誤讀の弊を馴致（じんせい）し、又正しき訓點の附け方を忘るゝおそれがあるから、之を防がんとする編者の老婆心に出たものである。

一、山陽先生小傳、日本外史、日本政記の解題、山陽先生の肖像及び筆蹟を加へて、先づ先生の人格に接して、論贊の思想と相待ちて、

精神の陶冶に資せしこと。

一、模範訓點以外の文と雖も、全部返り點を附し、やゝむづかしき所には送り假名を施し、且つ平易な頭注を加へ、徒勞を省いて、目的の貫徹を容易ならしめたこと。

余流寓多年、最後に山陽先生桑梓の地に卜居し、茲に百年祭をひかへて、先生の著作を鈔録し、先生の貴き思想を世に普及するの一助となすを得たのは、非常の光榮とする所で、一衣帶水を隔てた故郷松山の空を望み、舊師浦屋藤浦先生から、外史政記の講義を受けた少時を偲び、幼より舊師の家塾桃源巖に通はしめられた亡き父母の慈悲を追慕し、聊かその御心に副ひしを悦びつゝ、

昭和五年七月十一日廣島白洲眞道庵にて

水村 野中元三郎しるす。

山陽先生小傳

頼家の祖先

頼家の祖先は備後三原の人で、小早川氏に仕へて居たが、のち總兵衛諱は正茂といふ者、安藝國賀茂郡竹原に移り、四世にして又十郎諱は惟清に至り、染物屋を業として家が漸く榮え、郷黨の尊信を受けるやうになつた。その長男は彌太郎諱は惟寛で春水と號し、幼より穎悟にして儒學を勵み、のち藝藩に仕へて學問所の教授となり、三男松三郎諱は惟強は春風と號し、竹原に在つて醫を業とし、四男萬四郎諱は惟柔は杏坪と號し、春水と共に藝藩に仕へた。頼山陽諱は襄、字は子成、通稱は久太郎、山陽と號し、三十六峰外史、梅垞等の別號がある。安永九年十二月二十七日大阪江戸堀なる父春水の家に生れた。母は大阪の儒者飯岡義齋の女静子（梅垞と）で、生れた翌年天明元年に父春水が藝藩主淺野重晟公に抱へられたので、山陽三歳の時父母と共に廣島に移つた。

山陽の叔父

春風
杏坪

山陽の出生と幼少時代

山陽の母
梅垞夫人

山陽先生小傳

山陽幼時の詩

山陽漸く長じ、俊異にして讀書を好み、十三歳の時江戸に在つた父に書を贈り左の一詩を添へた。

十有三春秋。逝者既如水。天地無始終。人生有生死。安得類古人。千載列青史。

山陽と栗山

父の春水が之を柴野栗山に示したら、栗山が大に感賞して、春水子有り。之をして實材たらしめず。詩人たらしめんとするか。宜しく史を讀ましむべし。而して史は通鑑綱目より始めよ。と言つた。山陽はその後日々通鑑綱目を讀んだが、只治亂の大體を記すのみであつたので、栗山が聞いて益、之を奇とした。

山陽の遊學

寛政九年春、叔父杏坪に隨うて江戸に至り、尾藤二洲(二洲の妻は山陽の叔母)の門に入り、又屢、柴野栗山をも訪ひ、其の名が漸く世に聞ゆるに至つたが、翌年夏廣島に歸つた。時に年十九歳であつた。

山陽の幽居

寛政十二年山陽家を脱して京に向つたが、途にして連れ歸られ、藩命によつて幽居の身となつた。日本外史の著作は實にこの幽居

壯年時代

山陽と菅茶山

中に始めたものである。

かくて文化元年に至つて幽閉を宥され、同六年山陽三十歳の時、菅茶山の請に因つて備後神邊に赴いてその家塾を督し、又茶山の詩稿を校定した。茶山は深く山陽に矚目し、之に家學を傳へんとし、娶すに女姪を以てし、之を福山藩に推舉しようとしたが、山陽は之に應ずべくもあらず。文化八年茶山の許を脱し、大阪を経て京都に赴いた。

京に赴く

當時の交遊

山陽は茲に漸く平素の望を達し、初め居を新町に卜し、翌年車屋町に轉じ、門戸を張つて子弟を集め、群書を涉獵し、四方の文士と交つた。篠崎小竹、貫名海屋、猪飼敬所、梁川星巖、市川米庵等と親しかつた。殊に小竹とは實に莫逆の間柄で、日本外史を山陽から借りて自ら一部を筆寫したので、朋友著す所を自ら寫すに憚らず。足下は眞の知己なるかな。と山陽が感謝した程で、互に相助け合つた。山陽は京都に在つて門戸大に榮え、名聲の漸く高まつたので、父春

父に會ふ

山陽先生小傳

父の病氣

父の死去

晩年時代
西遊

母に事ふ

水の機嫌も大に和いで、文化十年有馬湯治に託して大阪に出て、山陽と相會し、翌年は山陽が廣島に歸省した。その途次山陽は茶山を神邊に訪うて前日の罪を謝した。

文化十二年三月父春水の病氣を氣遣ひ、便船に乗じて廣島に歸つたが、幸にして父の病輕く、古賀精里菅茶山の來訪に遭ひ、一夕詩酒の會を開き、旬日にして山陽は京都に歸つた。然るに翌年二月春水危篤の報あり。時に山陽は門生のために莊子を講じてゐたが、愕然として色を失ひ、晝夜兼行廣島に歸つたが、既に春水逝去の後であつた。因つて山陽は終身莊子を講じなかつたといふ。かくて京に歸つて嚴に三年の喪に服した。

文政元年山陽四十歳の時、方に父の喪を終へ、同三月西遊の途に上り、下關博多佐賀長崎熊本薩摩豊後豊前を遍歴し、龜井元鳳(陽)古賀穀堂田能村竹田廣瀬淡窓等を訪ひ、雲華和尚(大)と耶馬溪(陽)に遊び、同二年二月廣島に歸り、同二十三日母を奉じて京都に還り、嵐山芳野

水西莊

日本外史成る

日本外史を松平定信に
獻す

日本政記の稿を起す

山陽先生小傳

琵琶湖の諸勝に伴ひ、閏四月送つて廣島に歸つた。この後三度母を迎へて孝養至らざる所がなかつた。

文政六年春、居を鴨崖(鴨)三本木村に求め、水西莊と號し、庭中に一小草堂を設け、山紫水明處と名づけた。

日本外史は前記の如く、山陽が二十餘歳の頃廣島幽居の際に起稿したものであるが、三十歳の頃には大體出來上つて居た。但し當時幕吏の間に、倒幕的思想のあることを知り、沒收説もあつた程であり(山陽も之を愛ひ文化十二年歸省の際、且つ印刷術も幼稚であつたから、別に版行することもなく深く篋底に藏し、知友の他閱讀を許さなかつたが、文政九年の冬その刪修が完成し、翌十年には松平定信公(新樂)の求めに應じ、淨書の後一書を添へて之を獻じた。公は之を通讀し序文を書し、自ら編纂せる集古十種及び白銀二十枚を贈つて之を謝した。是より日本外史が大に天下に行はるゝに至つた。)

山陽は既に修史の宿志を達したが、猶之を以て足れりとせず。天

山陽病に罹る

保元年日本政記の稿を起し、も未だ成らずして同三年六月突如として咯血した。醫小石元瑞(妻梨影夫 人の養父)診して曰ふ。「是れ肺血なり。先生積年勞神の致す所治すべからず。先生は豪傑にして死を怖れず。故に實を告ぐと。山陽曰ふ、死生命有り。然れども我れ上に老母有り。且つ志業未だ成らず。たとひ一生理無くとも、宜しく醫療を加ふべし。我憤みて醫藥を服し傍死計を爲さん」と。その後攝養怠りなく日夜政記の稿を構へ、我必ず之を成して地に入らんと言つた。且つ家人を誡め母に病狀を報せず。只微恙あり尋いで癒ゆべしと報じてゐた。九月二十三日午後に至り、門人關藤藤陰を召して、政記の跋文を清書せしめ、眼鏡をかけ一々校閲した。關藤は豫て山陽の命で専ら政記記事の作成にかゝつて居たが、此日は特に山陽に呼ばれ關藤は背より腰までさすり下し、夫人は腹を押へ、子息又二郎等枕頭に侍りしに、五郎は(關藤のこと)と呼び、又二郎の差出す手を取り、又二郎が「オトツサン」と呼びかくる

山陽の死去

聲にや、頷くさままで、眠るが如くにして逝いた。享年五十三。洛東長樂寺畔に葬つた。

山陽の著書

山陽の著書は外史政記の外、その主なるものは、通議書後題跋山陽詩鈔山陽遺稿日本樂府謝選拾遺等である。

主なる門人

門人の主なる者は、後藤松陰(名は松陰、初め石川氏を稱ふ)、牧百峰(名は、江木鰐水、藤井竹外、森田節齋、岡田鳴里、名は橋字、は周輔)、鹽谷宕陰、中島米華、兒玉旗山(字は士敬)等である。

山陽の結婚と長子

山陽嘗て弱冠にして、藩儒御園氏の女を娶つたが一年許で離別となつた。その間に生れたのが元協、字は承緒、通稱は餘一、聿庵と號し、嫡孫を以て、春水の後を繼いだ。

山陽の後妻とその所生

山陽が京都に住んで後、小石元瑞といふ醫者があつて、博學多識の士で、常に山陽と往來して居たが、文化十二年正月、その養女里惠(影梨史女)といふものを娶つたが、性温順にして、深く山陽を信じ、内助の功が多かつた。復(字は士剛、通稱又、樹三郎)、醉(通稱三、樹三郎)はその所生である。

山陽先生小傳

結論

要するに、山陽は世の常の漢學者ではない。その手蹟のもてはやされるのも、人格を貴ぶ所以で、書家を以て目すべきものではない。その行爲の磊落不羈なる點は、希世の英傑であり、その詩文が一世を鼓舞して、天下の風雲を捲き起すに至つたのは、感激性に富める絶世の詩人であり、史乘に獨得の見識と筆力とを有して亂臣賊子を懼れしめたのは、卓越せる史家であり又評論家である。而して詩と史眼は實に山陽の生命である。中にも山陽の史學に於ける趣味と造詣とは決して一日の事ではない。山陽は幼時から軍記類を愛讀し、少年の頃には柴野栗山の勸めによつて通鑑綱目を讀み、又一日暴書の際、東坡史論を見て、天下亦斯の如く嘉みすべきの文あるかなと叫んで、のち心を文章に專にし、その東遊して尾藤二洲の塾に在るや、二洲と戰國の英雄を論じ、口角沫を飛ばして夜の更くるのも知らなかつたといふ。後又清の趙翼の二十二史劄記を愛讀せるなど、史學は實に山陽畢生の事業であつたが、遂に外史

政記等によつて其の名を成し、明治二十四年には特旨を以て正四位を贈られたのは、山陽も亦地下に感喜したことであらう。

著作の年代

外史の内容と書體

外史の効力

解題

日本外史

日本外史は山陽が二十三歳頃から著作にかゝつて、三十歳の頃大體出來上り、爾後刪潤措かず、四十七歳の冬完成したもので、山陽畢生の大著述である。

日本外史は源氏から徳川氏に至る武門の歴史で、史記の世家に倣うて、其の記事は各家別に記し、論贊は最初に掲げた總論とも見るべき大權論の外は、大抵各家の前又は後、稀には前後に一篇づゝあつて、合せて十八篇あり、その説は新井白石の讀史餘論から出てゐるものが多いといはれるけれども、その特得の靈筆は、能く讀者をして感奮興起せしめ、その一貫せる尊王の精神が、強く王霸の別を讀者の腦中に刻み附けて、遂に明治維新の原動力となつたのは、山

日本外史の編次

陽ならでは企て及ぶことの出来ない所である。日本外史二十二巻の編次は次の通りである。

卷之一	源氏前記	平氏
卷之二	源氏正記	源氏上
卷之三	同	同
卷之四	源氏後記	北條氏下
卷之五	新田氏前記	楠氏
卷之六	新田氏正記	新田氏
卷之七	足利氏正記	足利氏上
卷之八	同	同
卷之九	同	同
卷之十	足利氏後記	後北條氏下
卷之十一	同	同
卷之十二	同	武田氏上杉氏
卷之十三	同	毛利氏
卷之十四	同	同
卷之十五	同	織田氏上
		豊臣氏上

日本外史は幕府(征夷大將軍府)の歴史であるから、前記の如く、源氏、足利氏、徳川氏を正記とし、平氏は源氏の前記、織田、豊臣二氏は徳川氏の前記とし、北條氏は源氏の後記、後北條、武田、上杉、毛利氏は足利氏の後記としたのである。但しこゝに異例と見るべきは、新田氏を足利氏の前記とせずして正記としたことである。これは山陽が正史とちがふから一家の私心を用ひたよし例言に述べてある。蓋し吉野朝の忠臣に對する至情から出たものであらう。

日本政記

卷之十六	同	同	中
卷之十七	同	同	下
卷之十八	徳川氏正記	徳川氏	一
卷之十九	同	同	二
卷之二十	同	同	三
卷之二十一	同	同	四
卷之二十二	同	同	五

記事は門人の助力に須
つ

山陽の絶筆

日本政記は山陽晩年の作で、天保元年に起稿したが、同三年六月には病氣に罹つたので、いよ／＼其の脱稿を急ぎ、先づ論贊刪正（ぶんさんせんせい）の分（ぶん）から門人に清書せしめ、記事に至りては専ら關藤藤陰（せむらうとういん）に命じ年月事實を正して清書せしめ、元龜元年姉川合戦以後の分は、未だ草稿も無く、前例に準じて藤陰に書かしめ、自分は主として論贊の刪潤（せんじゆん）に勉めた。逝去の日の九月二十三日午後藤陰を呼んで、政記記事の草稿は如何程出来しやと問ひしに、今朝までに草稿をすまし、今朝より清書仕居候と答へ、傍より一枚一枚閱覽に供せしに、其の清書相すみ添削する氣力は最早これなく、以前の書例逐一其方承知の事故前に續け置いて宜し、他に政記の末へ入れたき文一篇ありとて清書を命じた。これが政記の跋文で、十日前に作つたもので、これが山陽の絶筆とも見られる。尤も眞の絶筆は政記の論贊太閤租税を増すの論だといふ。

かゝる次第であるから、政記も大體出来上つたものと見られるけ

政記の體裁

れども、外史の如く推敲（すいぎやう）を了するに及ばなかつたのは遺憾である。日本政記は神武天皇の御東征から後陽成天皇の太閤征韓役に至る一百七代の帝王紀編年體の歴史で、國家の重要事件を略記し、所に論贊を加へたもので、論贊の數は九十二ある。これも亦外史と同じく、治亂興廢の因、政治の得失を論じ、尊王愛國の至情紙上に溢るゝを見る。病に罹つて後、猪飼敬所（けいじよ）が山陽を見舞うた時、談が南北朝の事に及んで、議が大に合はず、敬所去つて後、慷慨憤激、目張り眉あがり、遂に正統論を補足し前論の後に加へた。其の稿の跋に、近頃客有り此説を發す。予之と相論せんと欲すれども、肺疾有りて劇談すべからず。更に一論を作らんと欲す。九月十二日の夜咳して睡る能はず。枕頭にて腹稿し、明日稿を録す、病重きにより精神を綴りて此に止る。制止する能はざるなりとある。九月十七日篠崎小竹等の見舞に來た時も、正統論を出して之を示し、且つ辯じて言ふ。敬所翁は當時の巨擘（きよひつ）（大）而も此言を出す。細事に

あらず。僕病めりと雖も辯ぜざるべからずと。是れ實に死を去る六日前、その熱烈想ひやられ、誠に一代の偉人たるを失はない。

訂正 山陽史論鈔目次

上篇 日本政記論文鈔

- 一 神武創業(模範訓點) 一頁
- 二 大日靈貴之德 三
- 三 兵權在上(模範訓點) 五
- 四 道一而已矣 七
- 五 仁德之所以爲仁 (以上原本卷之二) 九
- 六 天智定制 (以上卷之三) 一〇
- 七 清麻呂忠節 一三
- 八 藤原氏之功勞(模範訓點) (以上卷之四) 一六
- 九 光仁中興之政 一九

- 一〇 桓武明於治體 二
- 一一 政貴實不貴名 二四
- 一二 良二千石 二六
- 一三 繼續之爲事大矣 二九
- 一四 保則治邊 三〇
- 一五 以宗廟生民爲心 三三
- 一六 菅公貶竄 三五
- 一七 清行封事 三八
- 一八 延喜天曆之治 四一
- 一九 藤原實資可謂大丈夫矣 四三
- 二〇 源氏經紀與羽 四六
- 二一 後三條剛健(模範訓點) 四七

〔以上卷之五〕

〔以上卷之六〕

〔以上卷之七〕

〔以上卷之八〕

二二 憲清知時 五〇

二三 光賴挫賊勢 五三

二四 國之大政二已矣 五五

二五 賴朝善用人 五八

二六 賴朝除所忌 六〇

二七 承久之事未得其謀 六三

二八 廣元用人成我事 六五

二九 後醍醐厲精 六九

三〇 中興之政失乎 七二

三一 京師之形勢 七四

三二 正儀之深謀 七六

三三 制馭天下恩與威而已 八四

〔以上卷之九〕

〔以上卷之十〕

〔以上卷之十二〕

三四	正統論		八七
三五	足利氏之所以得天下	[以上卷之十四]	九四
三六	應仁之亂何由而起也		九七
三七	唯患己之得失 <small>(模範訓點)</small>		九九
三八	兵有形有勢有機	[以上卷之十五]	一〇一
三九	信長善用地利		一〇四
四〇	國之所以治亂興廢		一〇七
四一	光秀之所以忍於君		一〇九
四二	太閤善駕馭群雄		一一三
四三	織田豐臣善收用兵之利		一二五
四四	勝負之大機	[以上卷之十六]	一二七

下篇 日本外史論文鈔

一	武門武士 <small>(模範訓點)</small>	[原本卷之二]	一三三
二	平氏	[同]	一三七
三	源氏	[卷之三]	一三一
四	北條氏	[卷之四]	一三四
五	元弘之亂	[卷之五]	一三八
六	楠氏	[同]	一四一
七	新田氏	[卷之六]	一四五
八	足利氏	[卷之九]	一四九
九	形勢	[卷之十]	一五三
一〇	後北條氏	[同]	一五七

一一	武田氏上杉氏	[卷之十一]	一六〇
一二	毛利氏	[卷之十二]	一六三
一三	封建	[卷之十三]	一六六
一四	織田氏	[卷之十四]	一六九
一五	豐臣氏	[卷之十七]	一七三
一六	德川氏	[卷之二十二]	一七五

訂正 山陽史論鈔

野中元三郎編

上篇 日本政記論文鈔

〔一〕 神武創業 [模範訓點]

賴襄曰、我王國之成基、可謂深且遠歟。自神武以前、莫得而知焉。蓋以神明之胤、累葉積德、雖在西

〔累葉〕 代々ノ意。

〔遐邇〕音「カジ」、遠近ニ同ジ。

〔草昧〕未開ノ意。

〔碁峙〕音「キジ」、多ク並ブサマ。

〔帖然〕オチツキ安ンゼルサマ。帖音「デフ」。

〔天錫〕天カラ賜ハレルコト。錫音「シヤク」。

〔舊志〕古キ歴史、志ハ誌ニ同ジ。

〔俗如〕音「クワツジヨ」、廣キサマ。

〔曠昔〕音「チウセキ」、前日ノ意。

〔冢嗣〕音「チヨウジ」、世子ノ意、可美眞手命ヲサス。

〔推赤心人腹中〕己ノ「マゴコロ」ヲ人ニ推シテ疑ハザルコト。

〔禍〕音「コ」、禍ト同ジ。

偏遐邇屬望、而發之於此。爾抑當草昧之世、雄長碁峙之時、能一舉而定海內、海內帖然、以開千萬年之業。自非天錫、勇智首出、羣倫烏能如此。諡曰神武允矣。舊志稱帝德明達、豁如帝新得諸縣、而署之首長、皆疇昔之抗兵反刃者、仍而用之、無所變更。其感恩效力於民、民亦便安之、可知也。且夫以敵帥之冢嗣、而既納其降、則授之干戈、委以環衛之任、而不疑。非所謂推赤心人腹中者哉。後世庸主、每因親疎、私存形迹、不能服天下之心、而制

禍患之萌、皆不達於此者也。

遐邇——登遐。碁峙——碁布。天錫。推赤心置人

腹中。(後漢書)

〔二〕大日靈貴之德

賴襄曰、鴻荒之事、和漢同然。置而不論可矣。雖然、祖宗之所源始、亦臣子之不可不知者、非如漢人之語軒羲也。蓋大日靈貴之德、雖不可窺測、徵之

〔鴻荒〕太古ノコト。

〔軒羲〕音「ケンキ」、黃帝軒轅氏ト伏羲トノコト、支那太古ノ帝ノ名。〔大日靈貴〕天照大神ノコト。

〔玉璽〕 璽ハ「ミシルシ」ノ意、八尺瓊勾玉ヲサス。

〔后稷〕 周ノ遠祖、民ニ農事ヲ教フ。

〔整旅〕 旅ハ軍隊ノ意、「モロモロ」ト訓ズ。

〔文武〕 周ノ祖、文王・武王ノコト。

〔眇視〕 小サシト視ルコト。

〔八百載〕 周ハ八百年ニテ亡ブ、故ニ周ヲサス、載ハ歳ニ通ズ。

神器、如有可得而言焉。夫鏡者明也。劍者武也。而玉璽者仁也。信也。仁信明武。繼天君民之道盡矣。故以遺子孫。曰。視此猶視我。國祚之隆。當與天壤無窮。因其言之驗。於後可以知其德之基於前已。吾聞大廟之充神庫者。耕織之具爲首。因此觀之。其猶后稷歟。及至玄孫。發跡西土。整旅東征。與文武之業無異。而垂統千葉。一姓不替。足以眇視彼八百載。其德果不可測也。

鴻荒 國祚 寶祚

〔以還〕 以來ト同ジ。

〔變故〕 變事ニ同ジ。

〔靖難戡亂〕 敵ニ勝チ亂ヲ鎮ムルコト。

〔綱維〕 「オホヅナ」ノ意、國家ヲ維持スル法規ニタトフ。

〔肇造〕 音「テウザウ」、始メ造ルコト。

〔三〕 兵權在上〔模範訓點〕

賴襄曰。我朝以武立國。神武以還。經數十世。雖時有變故。靖難戡亂。頃刻而辨。天下不搖者。非以兵權在上。綱維可挈。故哉。然皆係內變矣。其有外叛。始見於景行云。蓋雖神武能肇造中土。東西諸道。號令未周。自崇神已漸命將四出。至此治熊襲。則親將伐之。何者。其事大也。其事大。則其用兵亦大。

〔雜〕「ハバカルト」訓ズ。

〔兵戎之事〕軍事ヲイフ、兵戎ハ武器ノコト。

〔有司〕役人ヲイフ。

〔高拱〕高キ所ニ在リ腕ヲコマヌキ爲ス無キコト。

〔殞軀〕殞ハ落、軀ハ身、戰死スルコト。

大兵之權不可委之臣下也。及賊再燃難於再動。兵則遣皇子代往其慎也如此。故至巡察東國雖初遣大臣至經略之任亦任之皇子其意可以見已。及至後世兵戎之事委之有司雖公卿亦不甚恤之。況於天子高拱深宮曰賊何能爲甚則不識將帥之面也。而責其殞軀夷賊及於奏捷又不時論賞終之致大權下移國勢一變長不復於古可勝歎哉。

以還——以降——以來。綱維。有司。

〔四〕道一而已矣

賴襄曰道一而已矣。道之在天下也猶日月也日月者天下之日月也非一國所私有也。道亦然。父子君臣夫婦無國無之而慈孝忠義有別不雜皆存於自然非有待於人作也。我邦列聖保民如子不讓堯舜禹湯其風俗尊君親上相愛相養又有過唐虞三代之民則雖無經籍其道固具在。特未

〔有別不雜〕夫婦ノ區別アリテ亂スベカラザルコト。

〔唐虞〕堯舜ノ代ヲ曰フ。

〔三代〕夏殷周ヲ曰フ。

〔一里〕里ハ「サト」村ト曰フト同ジ。

〔巷陌〕音「カウハク」巷ハ小路、陌ハ田間東西ノ通路ヲ曰フ。

〔較〕「ヤヤ」ト訓ズ。

〔釀冶織縫〕釀ハ酒ヲ造ルコト、冶ハ鍛冶、織ハ織物、縫ハ裁縫。
〔載籍〕書籍ノコト。

有名而教之曰仁曰義者耳。譬如人家同是一里也。而居之有舊有新。某巷陌某井溝皆有名目。記以帳簿。新者必問於舊者而知之。舊者曰是吾巷陌井溝也。可乎。今天下之仁義也。儒者指而私之。曰是漢之道也。有稱國學者。斥而外之。曰是非我之道也。皆非也。道豈有彼此。載之以文。彼較舊於我。彼來而貢之。我取而用之。與釀冶織縫之工。何異。載籍者織縫釀冶也。而仁義者蠶也。桑也。麴米銅鐵也。以麴米銅鐵蠶桑爲自彼來者。儒者之見

也。欲廢織縫釀冶者。國學者之說也。故曰皆非也。夫道一也。則學亦一也。寧有所謂國學云者乎。陋哉。

巷陌——阡陌。載籍。

〔五〕仁德之所以爲仁

賴襄曰。仁德之所以爲仁。可知已。仁德之言曰。天爲民立君。君自儉以養民。民富則君富。大哉言乎。

〔註〕 遺スト調ズ。
〔六經〕 詩・書・易・春秋・禮記・樂記ヲ謂フ。
〔尙〕 加フルト調ズ。

是我列聖之所傳而發之於帝所以貽範萬孫也。六經所訓百史所傳豈有以尙此哉自是其後循之者安違之者危下至武門一興一廢無不由此者大哉言乎有德者有言因其言可以知其德矣。豈有以尙此哉。有德者必有言有言者不必

有德。(論語)

〔六〕 天地定制

賴襄曰國朝之建創於神武開崇神景行而成於應神仁德。其後德衰大權下移姦臣專國微天智王業或幾乎熄矣。天智奮宗室之中運謀決機親斃大姦於鞠座之下即登天位。天下所望而退讓遷延歷於兩朝非有曠世之度何能如此。而裁定制度經緯天地以開萬世之太平蓋以武王之烈而兼周公之才稱曰中宗非溢也。大凡國朝以簡質治民上下同心國如一人是國勢所以威四外也。及通隋氏變質爲文殆失其故。及至天智百度大定後世莫改。大抵取於李唐之制而所以勝於唐氏者曰立吏簡取民廉是不失我邦固有

〔微〕 「無カリセバ」ト調ズ。
〔幾〕 「チカシ」ト調ズ。
〔熄〕 火ノ消ユル意、滅ブコト。
〔大姦〕 蘇我氏父子ヲサス。
〔鞠座〕 昔「フザ」天子ノ御座。
〔兩朝〕 孝德・齊明二帝ノ朝ヲサス。
〔曠世之度〕 世ニ空シキ度量。
〔經緯〕 治ムルコト。
〔中宗〕 中世ノ秀デシ祖先ノ意。
〔溢〕 譽メ過キノ意。
〔質〕 實ノ意、生レマ、
〔文〕 華ノ意、カザリ。
〔李唐〕 李ハ唐ノ姓。

〔模倣〕 模倣ト同ジ。
〔文綯〕 飾リノ意。
〔太甚〕 「ハナハダシ」ト
謂ズ。
〔剝削〕 民ヲ虐グルコト。

之美也。後王之過於模倣、文綯太甚、務於剝削、則不達祖宗
立法之意。而武門之治、民反便之、未必不由於此。雖然、武治
有其簡、而無其廉、所以不如王政也。

曠世之度。 經緯天地。 上下同心、國如一人。 模倣。

文綯。

〔七〕 清麻呂忠節

賴襄曰、所貴於士、以其有氣節。無氣節、非士也。士

〔織〕 楫ト同字、楫ニ同ジ
ク船ヲ進ムル具。
〔神龜〕 聖武帝ノ時ノ年
號。
〔寶字〕 稱德帝ノ時ノ年
號。
〔華胄〕 貴族ノ子孫ヲ曰
フ。
〔婦言云々〕 光明皇后ノ
請ヲ納レ東大寺・國分
寺等ヲ建立シタマヒシ
コト。
〔慶〕 落成ヲ祝フコト。
〔盧舍那佛〕 毘盧舍那佛
即チ大日如來ニテ奈良
ノ大佛ノコト。
〔膜拜〕 音「ボハイ」兩手
ヲ上ゲ地ニ伏シテ拜ス
ルコト。
〔兩朝〕 聖武・孝謙二朝
ヲ曰フ。

之有氣節、不獨以立其一身也、足以維持國家、定
天下之安危、國之有士氣也、猶家之有柱也、舟之
有楫也。舟無楫、則覆家無柱、則傾、國無士氣、則亾。
吾觀於和氣、清麻呂之事、有以知之。神龜寶字之
際、朝廷之士、可謂無氣節矣。橘諸兄、以華胄、位極
正一位矣。聖武之惑、溺婦言、事無益興造、不聞其
一言匡救之也。帝之慶、廬舍那佛也、與皇后皇太
子、備儀衛往。諸兄爲後乘、合掌膜拜、以當萬衆之
觀、而不恥也。吉備真備、以儒學受寵、兩朝位至大

〔宮闈〕車御殿即子皇后ノ居給フ處ヲ曰フ闈音「ト」

〔仲滿〕藤原仲滿ノコト
〔釋奠〕孔子ヲ祭ルコト
〔旌表〕アラハシ譽ムルコト

〔比丘〕梵語、僧ノコト

臣稱爲帝師矣。玄昉之濁亂宮闈、而熟視之而已。仲滿之驕橫、道鏡之僭竊、而如不聞知、相率拜賀、仰爲法王、而不恥也。觀此二人之所爲、可以推其他矣。景雲之元、釋奠大學、其二年、旌表孝子貞婦、其三年、百官朝道鏡於西宮。噫、釋奠之禮、何禮乎。旌表之典、何典乎。而眞備則以爲道行矣乎。故講禮講學、儼然稱士大夫、而無氣節焉、則其無益於國也如此。夫以赫赫天朝、祖宗百世之天下、而欲傳之一比丘、誰不知其不可、而莫敢言者、何哉。曰、

〔矜式〕音、キヨウシヨク、ウツジミ用ラシムル意ニシテ手本ヲ示スコト

惧禍也。當此時、有一人焉言之、是捐其一身、以存祖宗之天下也。清麻呂是已。故曰、士之氣節關係天下國家者、不可不養、此以爲倚賴也。及光仁天皇之卽位、首召還清麻呂、復其本官。是矜式士大夫、定天下之所向也。嗚呼、可謂知所務矣。天下可百年無如諸兄眞備者、不可一日無如清麻呂者。

華胄。釋奠。比丘。

〔八〕藤原氏之功勞（模範訓點）

賴襄曰、宜哉藤原氏之比隆於王室也。我王家、一危於皇極、再傾於孝謙、而匡正之者、皆藤原氏微鎌足、雖有天智、誰翼戴之。微百川、雖有光仁、桓武、誰定其策哉。其後又有基經焉。而光孝、宇多、得立焉。此五君者、皆光復大業、澤浹後世、謂之中宗、高宗、上接於神武、無愧焉者。而藤原氏援而立之、如捧赤日、而上之天衢、排雲霧、而光被山川草木。其功豈不偉也哉。有功斯有報、宜乎其與王室比隆。

〔百川云々〕 百川ハ藤原字合ノ子、光仁ノ稱徳ニ繼ギ桓武ノ太子トナルハ共ニ百川ノ策定ニカ、ル。
 〔基經云々〕 光孝ノ陽成ニ代リ宇多ノ太子トナルハ基經ノ力ニヨル。
 〔光復〕 光ハ大ニスル意。

〔天衢〕 音「テング」天ノ通路ヲ曰フ。
 〔光被〕 被ラスコト。

〔奕葉〕 累代ノ意。

〔殷殷〕 憂フルサマ。

〔宗社〕 宗廟社稷ノ意、國家ト云フガ如シ。

〔大臣之意〕 右大臣吉備眞備ノ異議アリシヲ云フ。

政記論文鈔

〔八〕藤原氏之功勞

一七

也。乃天道也。世徒見其中世以後、奕葉專擅也、而憎疾之過矣。夫使藤原氏無其前之功、而獨有其後之罪焉。爾則謂無天道、可矣。夫其專權也、非倚外戚之親也哉。如此五君、則概非其出也。而其殷殷運謀效力於此者、豈非其心以宗社爲憂、公且誠者也邪。天下之事、非公且誠、不能成也。況當其事之艱難危疑、以不公不誠處之、雖有才略智勇、安能有濟乎。觀百川之處事、可以見焉。孝謙有疾、有人曰、能治之、而卻不使進、及議嗣續、大臣之意、

〔抗悍〕心ノタケダケル
キコト。
〔自用〕自分ノ心ノマ、
ニスルコト。
〔恬然〕安キサマ恬音
「テン」。

有他所属而不顧。直矯遺旨。會百官。宣詔。不如此。則失機會也。可謂明決之才能。濟大事矣。雖然。其所爲。不幾於抗悍自用乎。而立談之頃。能轉危爲安。中外恬然者何哉。人心去。孝謙思得明主。屬望於光仁。而百川因而定之。爾桓武之事亦然。是之謂公也。誠也。公且誠。人心服焉。人心服焉。則天意從焉。故曰。藤原氏比隆王室。天道也。天道不可觀也。以人心視之也。

翼戴。奕葉。殷殷。恬然。

〔九〕光仁中興之政

〔中興〕一旦衰ヘシ世ノ再興スルコト、中ハ運ニアタル意。
〔洗濯磨淬〕心ヲ清メ磨ク意、磨ハ「トグ」コト、淬ハ音「サイ」ニラグ「ト」テ及物ニ燒キヲ入レテ堅クスルコト。
〔忠鯁〕ソノ心忠ニシテ剛毅ナルコト。
〔常平〕常平倉トテ米價安ケレバ買ヒ入レテ蓄ヘ置キ高ケレバ賣出スコト。
〔汰兵〕汰ハ無用ノモノヲ去ルコト。
〔鍊甲〕鐵ヲ鍊リ鍛ヘ武備ヲ整フルコト。
〔較〕音「カウ」明ナルサマ。

賴襄曰。光仁中興之政。如日之升。天地清明。足以使百官萬姓。洗濯磨淬。以求副上意。非帝之勵精。自彊不息。曷能如此。而何弊不可革哉。黜中立自全之大臣。收其兵權。代以忠鯁。廢驕縱難制之中宮。併廢其所生。更立賢明。國本立矣。置常平。濟穀貴。省官汰兵。選將鍊甲。儲糧防邊。賞功勞。而罰退懦。其舉動處置。較有次第。可以爲後世之法矣。夫承前朝彫弊。

〔同〕 網ニ同ジ。

〔給復〕 租税ヲ免ズルコト。

〔制令之日〕 大寶律令ノ下リシ日ヲ云フ。

〔事殷〕 事ノ多キ意。

〔蠶食〕 徒食ノ意。

〔不登〕 實ラズト謂ズ。

〔菜食〕 人ノ飢エテ相色ノ青キコト。

〔糜費〕 音「ビヒ」無益ニ費スコト。

〔冗官〕 冗音「ジョウ」ムダノ意。

〔身庸〕 庸役ノコト。

〔天府〕 六衛府ヲサス。

〔三關〕 近江ノ邊阪・伊勢ノ鈴鹿・美濃ノ不破關ヲ云フ。

〔點〕 指定スルコト。

之餘、上下共困、當以罔利富國爲務也。而史無所見、所見者、數免田租、給復邊民也。是何以然。吾嘗讀其朝議、曰、制令之日、限置官員、職務不滯。今官衆事殷、蠶食者衆、穀帛難生、而用之不節。一歲不登、便有菜色。昔人稠田少、而有儲蓄。今地闢戶減、而患不足。由節用與糜費爾。當今之急、省事息役、并省官員、上下同心、唯農是務、則用足而廉恥行矣。是省冗官之議也。又曰、諸國兵士、頗多羸弱、徒免身庸、不歸天府。自今除三關邊要外、隨國大小爲額、點殷富百姓、才堪弓馬者、專習武藝、應徵發其羸弱、皆就農業。是汰冗兵之議也。皆鑿鑿

然可誦法。所以能行賑恤於不足之時也。

自彊不息。 鯁骨。 蠶食。 菜色。 用足而廉恥行矣。

— 衣食足則知榮辱。 (管子) 羸弱。

〔一〇〕 桓武明於治體

賴襄曰、桓武即位、未百日、即下詔、罷員外官。國司奸濫者、任雖未滿、貶降。夫國司之奸毒、被國內黜一人、而一國悅。猶有說也。罷員外之官、必招失職之怨。以常情觀之、始臨宇內、宜

〔鑿鑿然〕 明カナルサ

〔誦法〕 誦シテ法トスベキコト。

〔員外官〕 定以外ニ置ケル官ヲ謂フ。

〔物力〕 富カト同ジ。
 〔支配〕 コ、ハ分ツ意、
 又管轄。
 〔暴殄〕 ムヤミニ消費ス
 ルヲ謂フ、珍音、テンシ
 盡ス意。

布恩德、收人心。故古今人主即位、往往大赦與改元、並出例也。今下如此之令、人情所不樂、而桓武首行之、汲汲如不及何哉。王者之恩、不在小惠、顧天下之利害、民便安與否而已。是庸主之所畏憚、而英主之所斷不顧也。夫帝者如何君哉。營無前之宮城、闢未收之版圖、其精神氣力、百倍前代人主、可知也。而觀其他所爲、於凡天下之事、所舉少而所廢多、嗚呼、可謂明於治體也。蓋國家之患、每病物力之不給。人主者、收天下之物、而支配之天下者也。以爲己之有、而暴殄之者、謂之昏主。不足言也。其次知其不給、而無奈之何也。總總然

〔總總然〕 總音、サイ、恐
 ルルサマ。
 〔左支右吾〕 支音ハサ、
 ハル意。

〔綽然而有餘裕〕 ユツタ
 リトシテ迫ラザルコ
 ト。

議之、或計增尺寸之利、而終無成事。左支右吾、不敢有所爲者、今古一也。無益之費、無用之官、非英主、莫能省之。省一無益者、則息天下物力之一分、日積月累、乃綽然而有裕。以有裕之本、以臨天下、天下何事不可成。宜乎帝之能舉前代所不能舉哉。故吾贊桓武之業、不於其舉、而於其廢廢者、所以舉也。

暴殄。左支右吾。綽綽然有餘裕。孟子

〔一一〕 政貴實不貴名

賴襄曰、政有名美而實不稱者、不可不察也。政貴實、不貴名。貴名則無益於民。貴實則有利於國。國與民相須、而存者也。天智定賦役、當其朝、因大水免租。天武定諸國民產、爲三等、中戶以下許貸稅。自是其後、賑貸除免之政、不絕於列朝之冊。夫曰賑曰貸、名之美者也。使其實規官利、非恤民窮、民不被其德。適足以招之怨。如宋王安石所爲是已。國朝之政、以此恤民而已。古曰、爲富不仁。爲仁不

〔賦役〕 租稅ト徭役ヲ曰フ。

〔冊〕 記錄ヲ曰フ。冊又冊ニ作ル正音「サク」。

〔王安石所爲〕 謂ハユル王安石ノ新法ニシテ青苗法ナドヲサス。〔爲富不仁〕 孟子滕文公上篇ニ出ゾ。

富。使民被惠、則國無所利。有所利、則民不被惠。二者終不可並行邪。曰不然。國與民相須而存者也。故貸而不責其還者、所以生還之道也。今夫有貸金於人、其人不能還也、則呵責催督之、呵責催督而不獲、則罵詈而絕之。絕之則無復還之道矣。何若姑緩之、俟其可還徐取哉。後世之治民者、徒知呵責罵詈之而已。吾未知其果利於國也。

爲富不仁矣。爲仁不富矣。孟子 呵責。

〔一二〕 良二千石

〔二千石〕 地方長官ノコト、漢代郡守ノ年俸二千石ナリシヨリ起ル。
〔漢宣〕 漢ノ宣帝ノコト。
〔有レ國〕 國トハ諸侯ノ國ヲ云フ。

〔六十六人〕 六十六國アリ故ニ國司亦六十六人有リ。

〔殷阜〕 殷ハ盛、阜ハ大豊カナル意。

賴襄曰、我朝之有國司、猶漢之有二千石也。漢宣有言、與吾共治民、其唯良二千石乎。漢有郡有國、國委之其君相、非二千石所能制也。如我朝、一王與六十六人、共治四海、其任之重、爲如何哉。故藤原冬嗣曰、妙簡廉能、任守介、其新除者、特賜引見、勸諭治方、不拘以法律、擢著績者、以補公卿之闕。良岑安世則曰、國司堪任者、難多得。得一良守、令兼帶數國、擇殷阜地、并給二守祿。先試之一國、明

〔宰輔〕 宰相ト同ジ即チ公卿ヲサス。

〔漁〕 食リ取ルコト。

〔優裕〕 「ユタカ」ナル意、優待スルコト。

驗治否、皆有識之言、非必按漢宣之故、而與之暗合者矣。而淳和盡嘉納之、宜乎其不墜。桓武中興之業也。當時宰輔多出於國守、皆習知民事、非亦其效乎。中世以後、則不然。公卿矜其門地、下視國守、而疎外之。一視貪廉、無所激勸。己或不見其面、況使人主引見之乎。況擢以與己比肩乎。國守者、位賤官卑、祿薄而任重者也。任重而祿薄、則易漁於民。官卑位賤、則難望於君。君有以勸勉優裕於法律之外、然後可以責其廉、而異才之士出焉。否

〔宰〕長タル意。

則是驅之於貪也。所以中世以後、貪守常多也。及至其後、用吏卑賤、祿薄者、以自代、則其貪益甚矣。至於輓近、武門之宰民者、目曰代官、存此名耳。而其卑賤且祿薄、難望於君、而易漁於民者、什倍於國司。則欲民之被善治、難矣。安得用冬嗣安世之意、而少救之。

二千石。暗合。比肩。輓近。

〔一三〕繼續之爲事大矣

賴襄曰、國家盛衰之機、每由於繼續之際、不可不深察也。繼續之爲事大矣、而難言也。愛憎主、其中而黨援乘其外、大利所在、大禍所伏也。不斷以公道、而挾私用術、自謂濟其志、而適爲大姦之地者、往往而然。論者以爲王室之衰、由文德以幼主爲嗣。余則曰、由仁明之用私於繼嗣之際而已。至文德之時、則藤原氏勢已成矣。不然、文德何以不敢立所愛長子、而立生甫九月之嬰兒乎。至如源常源信、並以嗟峨子位與良房抗、使一發異議、天子將倚以爲重、乃甘附和之、以成其

〔幼主〕清和天皇ヲサス生レテ九月ニシテ太子トナル。
〔仁明云々〕仁明天皇先帝淳和ノ子ヲ立テ、太子トナシ後之ヲ廢シ冬嗣ノ女ノ生ム所ノ皇子〔文德〕ヲ以テ之ニ代ヘシコトヲサス。

〔舅〕「ヲチ」(母ノ兄弟)

〔愛子〕高倉天皇ヲサス。

勢何取於宗室大臣也。豈以己爲良房舅而私之耶。其後平清盛之暴進官爵。由於後白河之欲立愛子。而當時朝臣。連姻平氏者。黨焉。其情同也。

附和。

〔一四〕保則治邊

賴襄曰。國之有亂。譬若人之有疾。謀之良醫。雖未診其脈。而聞其患狀。察知病之所因。曰。是因此焉。

〔某方〕或ル處方ノ意。

〔愈〕癒ニ通ズ。

〔夷然〕安ラカナルサマ

夷ハ平ノ意。

〔庸醫〕平凡ナル醫ヲ云フ。

〔藤原保則〕右大臣繼體ノ曾孫。備中備前ヲ治メ出羽ノ夷ヲ平ゲテ大功アリ。

〔不攻〕病勢ヲ攻メ滅スコト。

〔補〕體力ヲ補フコト。

〔復庸調〕庸ハ役、調ハ稅、復ハ免ズルコト。

〔夷俘〕「トリコ」。

〔一方〕一ツノ處方ノ意。

〔由藤原基經〕出羽ノ夷叛シ國守防戦シテ敗ル攝政基經保則ヲ召シテ計ヲ問フ。

耳以某方治之愈矣。故雖症有劇變。夷然不驚。非如庸醫之動色失措也。如藤原保則者。豈非治邊之良醫歟。其曰先威後恩者。不攻則補不可施也。撫慰未叛邑里者。扶元氣以壓疾勢也。請復庸調。賑給夷俘者。則將息病後。而病之因。實在於此也。故病各有因。病者又有強弱。不可守一方。是以治兩備以緩治。與羽以嚴治。期於愈人。不必專功於己。他醫有慣此症者。可引以助我治。是以薦小野春風。以同其事。而二人所以奏此效者。實由藤原

基經。基經其猶病家擇醫而委任之歟。雖然其不賞保則不罰前守者病愈而不謝醫也。同視良庸。後有疾誰效力者哉。

庸醫 良醫。

〔一五〕以宗廟生民爲心

賴襄曰。宇多之爲英主也。其攬權柄。振紀綱。躬勤儉。舉賢能。以宗廟生民爲心。所以接天智桓武之業者。不必論也。獨觀

〔攬〕 トルト則ズ。

〔兵故〕 兵事ニ同ジ。

〔文恬武熙〕 恬音テン。安ノ意。熙音キ。和ノ意。文官モ武官モ遊樂ニ耽ルコト。
〔風魚ノ警〕 海上ニ騷動ノ起ル戒。
〔差〕 遺スコト。

〔罷〕 音ヒ。疲ル、意。

〔預〕 コアラカジメト訓。大豫ニ通ズ。

其處分邊防。足以知其他矣。宰府數奏寇警。詔曰。勿以兵故失農時。且防且耕。大哉言乎。可以爲百世法也。大凡太平之世。四海無虞。文恬武熙。一有風魚之警。上下相驚。奔走警告。差將吏。運糧仗。國內爲之騷擾。而寇爲何者。來爲何由。或未之知也。來於東。則東奔。來於西。則西奔。來者之虛實未確。而奔者已罷極矣。以彼爲虛。以廢我防。而實矣。其力不可支也。以彼爲實。以盡我防。而虛矣。其費不可給也。如是數次。國有不內壞者乎。嗚呼。亦盍不反其本思之。沿海之鎮。何爲而置哉。其將吏守何職。兵卒服何業。我預於平日。命爲之處置。無

〔援〕 亂レ騒グサマ。

非備寇寇至有戰而已。何必擾擾來告我。我亦何必擾擾往援之。帝之意蓋亦如此而已。但雖將卒備矣。未有不食而能戰者也。故曰。勿廢農時。且耕且戰。夫使戰而無耕。何資以戰。耕而無戰。亦何損於國哉。故寇有虛有實。而國無損有益。故曰。帝之言可以爲百世法也。帝不徒言之也。當時寇出於實。而筑前守防戰大捷。其効驗如此。雖然。當時所以能爲此言。成此効者。又有其本焉。本者何也。曰。收權柄。振紀綱。躬勤儉。舉賢能。以宗廟生民爲心。

權柄。 紀綱。 綱紀。 文恬武熙。 恬熙。 風魚之災。

盍不反本其思之。 盍反其本。(孟子)

〔一六〕 菅公貶竄

菅原相公之貶。世專咎藤原時平。稱讒臣。必以爲稱首。賴襄以爲不然。然則誰所致。曰。宇多致之也。宇多非患相門之如彼。故擢公使與之衡。亦丁寧醍醐。專聽於公者也。故曰。是所以禍公也。夫如彼者。非一日也。中外慣習。以爲當然。擢之寒族。使與

〔相公〕 相ハ大臣ノ唐名、道眞右大臣タリ故ニ曰フ。

〔衡〕 ハリアフコト。

之衡而能衡焉。無敢異議何哉。鑒識之者在焉爾。故宇多在位則儼然右大臣人望而畏之。一去位則文章博士妄據政府也。雖無時平不可久安者勢也。且夫家宰之寵於父者其子必憎之。憎其倚父寵以制我也。以為我自有所用何必是且己所用與己年齒相若志趣相投而父所用皆否。民庶之家且然況人主有天下者乎。人主之所樂者此位也。故其所忌莫甚於兄弟之逼於己。中其所忌以使恣其所樂宜乎其言易入也。況出於己所用

〔家宰〕 一家ノ吏ヲ曰フ。

〔所忌云々〕 時平、道眞帝ヲ廢シ帝ノ弟齊世親王ヲ立テントスト議ス。

〔情與勢〕 事情トナリユキシ。

〔遺誠〕 宇多天皇ノ醍醐天皇ニ遺サレシ訓誠ノ書。

常所愛信者之口乎。故延喜之貶菅公不必待時平之數言也。其情素然也。情與勢者天下之所不能違也。而宇多欲以一紙遺誠禁之其不可也必矣。故致菅公之貶者非宇多而誰乎。而公亦可謂不自慮者矣。吾嘗審遺誠所言立儲禪位之議菅公實贊決之曰事留變生蓋是時基經之女未有所生。生則不可不立也。公豈慮於此耶。然已定儲矣。雖不禪位可也。其意蓋謂雖禪位猶當傍觀扶植之不知權已不在我。我言寧可行耶。宇多崩於

〔扶植〕 タスケ立ツルコト。

〔輔翊〕音「ホヨク」タス
クルコト。

承和元年。去禪位三十四。專修佛法。噫以此三十
四年間。讀經研法之勤。移之於政。政當更何如哉。
而公亦終其輔翊之功。何貶謫憂死之有哉。故曰。
菅公之貶。宇多致之也。而公亦有以自取之。

寒族。鑒識。

〔一七〕清行封事

賴襄曰。三善清行以實用之才。爲實用之學。雖菅原相公恐

〔封事〕上書ノ中密封シ
テ上ルモノヲ曰フ。

〔版籍〕土地ト人民トヲ
曰フ。

〔息耗〕増減ニ同ジ。

〔倍・滋〕共ニ「マスマ
ス」ト訓ズ。
〔短祚〕音「タンソ」在位
ノ短キコト。

有所不及。其封事所言。雖有不敢盡者。而切中時弊。可用當
世。與彼爲無用之文詞者。大異其意。不過張紀綱修版籍。以
復物力而已矣。夫物力者。國之所以存也。而其所以盛衰息
耗者。在於紀綱版籍二者。故祖宗定制。必於此致意焉。使後
世子孫。賴以守其國。無此不可一日守也。然守之久。二者歲
弛。月廢。名存實亡。其終至於守空器。而天下之實移焉。是和
漢之所同。而國朝爲著焉。清行生於其漸弛廢之時。欲有以
救濟之。當時君相。非不嘉納之也。而不能盡用。及至其後。弛
者倍。弛廢者滋。廢獨後三條有志於興復之。而短祚不能有

成委靡壞墮。以至保元而窮矣。由二者之不修不張也。豈非百世之永鑑哉。天下之事。固有衆人不憂。而有識之士。獨憂之者。上共其憂。則其憂可止。上不共其憂。而使之獨憂焉。憂將日深耳。烏見其止也。清行此時已七十矣。而位不過四位。官不過儒門常格。既而纔得參議。未幾而沒。嗚呼。此人也。而不知用。則所謂延喜之政。非空名無實者耶。向使寬平不早去位。與菅公並用焉。以盡其才。則可以收興復之實效矣。吾不獨爲此人惜。爲王家惜也。自古有人才之用舍。關國家之運者。豈獨清行哉。

〔寬平〕 宇多帝ヲサス。

封事 切中。 版籍。 嘉納。 空名無實。 有名無實。

〔二八〕延喜天曆之治

賴襄曰。世之言王政。必稱延喜天曆。以其典章文物爛然具備而已。察其實。多不稱者。譬若人之風丰。朕麗。心腹蓄疾。是良醫之所畏。故識者於二代。無取焉。而謂天曆不及延喜者。非也。然當時已謂然矣。觀村上與老吏問答。可見焉。襄獨以

〔延喜天曆〕 醍醐・村上二朝ノ年號。
 〔典章文物〕 規則制度ノ類ヲ曰フ。
 〔爛然〕 明ナルサマ。
 〔風丰朕麗〕 委ノウルハシキコト。
 〔與老吏問答〕 村上帝老吏ニ問ウテ曰ク延喜ト天曆ト何レカ勝ルト老吏曰ク主殿寮多ク松

明ツ進メ半分堂前ニ草
ヲ生ズ前代ト少シク異
ナリト番シ政務夜ニ入
リ錢入餘リ無キヲ謂
フ。

〔主殿寮〕 宮内省ニ屬
ス、供御・酒掃・燈燭等
ノ事ヲ掌ル。

〔半分堂〕 大藏省ニ收ム
ル歲入十分ノ一ヲ割キ
テ納ムル所。

天曆爲勝延喜何以知其勝卽此一事以知其勝也。夫以萬
乘之尊問政事得失於一賤吏非其留心於政孜孜不倦何
能如此至聽其言以自知不足益勤於政則人主之所絕無
而僅有足以爲百世之法矣。蓋老吏言所謂主殿寮多進松
明者言劇務至夜未已也。其清其本源使不至煩劇上也。其
次雖至煩劇勤而不倦也。倦而不勤斯爲下矣。所謂率分堂
生草者言歲貢無餘也。夫量入以爲出國計常有餘者上也。
其次出者與入者相當也。量出以爲入而猶不足者斯爲下
矣。醍醐繼列朝太平之業而村上承天慶大亂之後國用之

〔贏縮〕 贏ハ餘ルコト、
縮ハ足ラザルコト。
〔縣絕〕 隔ルコト。
〔視〕 比ブト調ズ。

〔藤原實資〕 實賴ノ孫。

政記論文鈔

〔一九〕藤原實資可謂大丈夫矣

四三

贏縮宜相縣絕也。而其賑恤之政視之延喜無或不及。非勤
政之效何以至此。以此言之雖曰天曆勝延喜可也。
風丰—風采。 絕無而僅有。 量入以爲出。 贏縮。
縣絕。

〔一九〕藤原實資可謂大丈夫矣

賴襄曰藤原實資可謂大丈夫矣。當權臣擅政舉朝攀附之
時雖天子猶伺其喜怒獨實資以其同族特立不阿。至天子

〔天子倚賴云々〕三條天皇ノ時道長威福ヲ擅ニシ上下之ニ阿ル帝ノ皇后ヲ立ツルヤ朝臣道長ヲ擯ツテ入朝セズ實資獨隆家等數人ト往ク帝竊ニ實資ニ倚賴ス。

〔上東門院云々〕門院ハ道長ノ女、一條天皇ノ皇后、其ノ入内ノ時道長一時ノ名流ニ請ヒ和歌ノ屏風ヲ作ル實資獨之ヲ拒ム。

〔皇太子云々〕三條天皇位ヲ後一條ニ讓ルヤ皇子敦明親王ヲ立テ、新帝ノ儲貳トナサントス道長後一條天皇ノ弟敦良、後朱雀ヲ立テントス帝聽カズシテ敦明ヲ立ツ而シテ實資ヲ以テ東宮ノ傳トナサントス實資衰老ヲ以テ辭ス。

三條天皇ノ崩後敦明遂ニ廢セラル。

〔皇太弟〕前記敦良親王ヲサス。

倚賴之、以爲安、可不謂大丈夫邪。如不肯書上東門院之屏風、激一世不振之士氣。吾讀史至此、未嘗不想見其人。以如此之世、猶有如此人也。又讀至其辭爲皇太子傳、則有異焉。敦明、權臣所不欲立、而天子立焉。倚實資以扶植之也。爲實資者、何不慨然以身許之、而以衰老不堪爲辭乎。此時實資以大納言爲右大將、蓋歲七十矣。後五年、乃遷右大臣、兼皇太弟傳、所謂皇太弟、乃權臣所欲立也。誠使衰老不堪、何以辭於前而不辭於後。又二十餘年而沒、蓋九十矣。其嬰鑠可知也。則前之辭者、非遁辭邪。觀實資之平素、非怵禍福、喪廉

〔嬰鑠〕音「クワクシヤク」老イテ壯ナルサマ。

〔應仕〕厚キ祿ニテ仕フルコト、應ハ厚キ意。

恥、唯官爵是戀、如當時公卿比也。豈度時勢之不可爲焉爾。邪。苟然、何併不辭其官、高視事外、而應仕至死乎。抑以己受國恩特厚、不敢以就安。姑與權臣共事、以匡濟其太甚耶。或以吾論實資爲苛也。夫唯實資也。故吾苛論之。當時舉朝之士皆婦人也。婦人不足責。有一丈夫焉。吾烏得不責以其道哉。如源顯基之事、後一條崩後、辭官隱居、卻醫藥以死、則疾世濁亂、潔身而逝耶。審然、是之謂真大丈夫。

想見其人。 嬰鑠。

〔二〇〕源氏經紀與羽

〔陸奥會〕安倍賴時ト其ノ子貞任ヲサス。
 〔征勳〕音「セイセウ」討チ殺スコト。
 〔出羽會〕清原武則ヲサス。
 〔賞格〕賞與ト曰フニ同ジ格ハ定例ノ意。

〔撫綏〕平「フシフ」撫デ柔グルコト。
 〔帖然〕一頁ニ出ヅ。
 〔儼然〕驕ルサマ、儼音「エン」。
 〔託〕身ヲ寄スル意。

陸奥之會侵蝕六郡不奉貢賦源賴義以國守計征勳之借出羽會之力纔能平之朝廷遣代人而兵民服賴義不奉其號令賴義以獨力經紀二國十餘年及奏捷爲將士請賞格朝議久不決其後賴義子義家再平陸奥之亂而朝議以爲私鬪又不與賞典非源氏父子以私恩撫綏之則東國豪傑寧能帖然哉異日源氏坐奪朝權者決於此矣朝廷公卿方以聲色歌詠爲事而血戈汗馬之勞委之邊鄙之吏又不肯償其勞而欲儼然長託於其上是天道所不與也大凡治安

〔亢〕音「カウ」高アルコト。
 〔痞癘〕塞ルコト。

〔猥瑣〕卑シコト。
 〔氣運〕運命ト同ジ。

之久上者亢而不下下者滯而不上上下下痞癘不通而天下覆矣下者反制其上上者反制於下必然之勢也當是之時英偉俊傑之士多生於下而上者皆猥瑣頑鈍無恥之人是之謂氣運之變故其勢不得不反覆也噫可不悞哉
 侵蝕 汗馬之勞 儼然 上者亢而不下下者滯而不上

〔二一〕後三條剛健 (模範訓點)

後三條帝十歲爲皇太子、三十五卽位、在位五年而崩、藤原賴通歎以爲我邦之不幸、信矣。史稱帝剛健嚴明、是固然、然不知其剛明之本、在於誠正也。夫苟不誠不正乎、則所謂剛者有息、而明者有蔽焉。是故一旦卽位、痛自節儉、勤勞機務、不敢逸豫、而行之以其剛與明、以令天下。雖藤原氏之盤踞偏強、歷世難制者、畏憚自戢、俯就我馭者、由是道故也。唯然是以其所使唯其才、不以愛憎爲取捨、不敢私便於己、利於天下而已。夫奪大臣之權、

〔盤踞偏強〕ハビコリ剛情ナルコト。

〔戢〕斂ムナリ。慎ム意。

〔嚴〕音「カク」訓「アルコト明ニスルコト」。

〔裴度〕唐ノ憲宗ノ朝、淮蔡ヲ平ゲテ功アリ、中書令トナリ、晉國公ニ封ゼラレ、四朝ニ歴事シテ中外ニ重ンゼラル。

〔宗社〕宗廟社稷ノ意、國家ヲ云フ。

〔休戚〕喜ト憂ト。

收新置莊園、置記錄所、親覈其是非、皆不便於彼者、而彼莫敢齟齬、何哉。是天下之正也、非帝之私也。唐裴度語其君治方鎮之道曰、處置得當、以服其心而已。今帝所處置、亦足服藤原氏之心、不然、聞其崩殂、何不相慶幸、而歎嗟如此。蓋藤原氏之幸、乃我邦之不幸、其實我邦之不幸、卽藤原氏之不幸也。彼與宗社同休戚者、而自其父祖、不肯恤國家、而營己之私、至此乃知其非爾。雖然、藤原氏之營私也、亦由歷世帝王之自徇其私、唯帝也無

私故足以禁其私也。

剛健嚴明。逸豫。齟齬。休戚。

〔二二〕 憲清知時

賴襄曰、所貴於士者、以其知時也。時有勢焉、有機焉。勢所推移、機所起伏、非必難知也。而莫之知者、有所蔽耳。唯有識之士、能先見之、去危就安、去濁就潔、舉世不知、而已獨知之。知之明、故決之果。彼

〔勢〕 成り行キノコト。
〔機〕 「ハブミ」ノコト。

〔憲清〕 姓ハ佐藤刺斐シ
テ西行又ハ四位ト稱ス
藤原秀郷九世ノ孫故ニ
文中藤原ヲ冒ス。

〔桀驚〕 ワルヅヨキコ
ト。

〔閨閣〕 婦人ノ房、又婦
人。后宮ヲサス。

〔晏然〕 安キサマ。

〔謹擘〕 音「クワシクワシ」
曠グコト。
〔汨沒〕 音「コツボツ」沈
ムコト。

之所驚、我以爲當然。如藤原憲清不其然乎。當是之時、天下之勢何如哉。君臣殉私、廉恥喪亡、國家紀綱、所以維持天下者、無一存者。而天下之武健桀驚者、隱然成黨於下、竊笑朝廷、以爲不足畏。朝廷方計較閨閣之寵、易置童蒙之君、宰執之臣、骨肉爭權、不省宮城之外有何事。大亂之機將發矣。而上下晏然處之何哉。譬若失火之家、舉家宴集、謹擘及鄰閭來救、始知之。彼汨沒於爭競之間、中熱外譟、顛倒是非。是以其機露於前、而不能見。憲

〔奔波〕 争ヒ趨ル意。

〔端倪〕 始終ノ意。

〔慶資〕 本ヲ無クスル意。
〔巖居川觀〕 嵩ハ巖ニ同ジ世ヲ逃レテ山ニ居リ又ハ川ノ流ヲ觀テ「ノンキ」ニ慕ス意。

清資不過北面官。不過左兵衛尉處。一世奔波之後。有以窺其端倪。以爲事勢如此。官不可爲。故雖頗受寵使。而決然去之。其曰歸佛辭世者。特託焉而遁。或觸焉而發耳。世蓋駭愕。以爲不近人情。不知自憲清視之。舉朝之士。皆喪心者也。憲清棄官之歲。而藤原賴長爲內大臣。後二十年而保元之禍作。自是喪亂蔑資。海宇反覆。而憲清巖居川觀。超然事外。嗚呼可謂士也已。

童蒙。骨肉。端倪。不可端倪。巖居川觀。

〔二三〕 光賴挫賊勢

賴襄曰。國之所以盛衰者。以士氣之振與不振。國朝之衰。其公卿平時奔競。有事逃避。唯不知退而守其廉。是以不能進而死其節也。故凡士之養氣。在其平時。國之養士之氣。亦在其無事。無事之退。可以望有事之進。有事而能果於進者。及事平。則亦勇於退。其爲氣一也。當賊信賴之幽兩宮也。平

〔兩宮〕 二條天皇ト後白河法皇ヲサス。

〔鼠竄〕音「ソザン」コソツ
ソコト逃ル、コト。

〔俛〕音「フ」俯ト同ジ「ダ
レ」ト訓ズ。
〔噤〕音「キン」口ヲツグ
ムコト。

時決死生、以競官爵、威焰赫然、凌壓人者、奉首鼠
竄、莫敢出身當其難。藤原光賴因會議、面折信賴、
使其俛首喪氣、當時賊黨布在朝廷者、噤不能出
一語、足以挫狂賊之勢、而定天下之向背、不待平
氏來討、而其勢決矣。吾嘗曰、平平治之亂者、光賴
爲首、而重盛次之。及事平、天子欲大用光賴、參政
府、則稱疾辭之。蓋視朝政之非、已志不立、當衆人
計功爭進之際、獨決意而退耳。可謂勇矣。

鼠竄。面折。

〔二四〕國之大政二而已矣。

賴襄曰、國之大政二而已矣。曰兵、曰食。二者國之
所以盛衰也。有兵無食、無以養之。而食之所以生
者、在於民。故民爲本、食次之、兵又次之。我邦先王、
常自儉、以撫其民。撫其民、所以豐其食。其食豐、故
其兵強、以威制海外諸國。是王政所以興隆、禮文
所以備具也。其後徒事禮文、而遺其本、流爲奢靡、

〔禮文〕制度文物ヲ曰
フ。

〔克剝〕 虐グルコト。

〔守護地頭云々〕 文治元年賴朝ノ奏請ニ因ル。

〔逋租〕 未納ノ租稅ヲ曰フ、逋ハ逃ル、意。

〔驍虓〕 強キコト。

〔撥賦〕 奉奉トモ書ク汝取ト同ジ勉ムルサマ。

克剝其民、而委兵於將吏。將吏自以其計策、蓄糧餉、養士卒。而朝廷不省。是王政所以衰頹、而武門代之興也。於是置守護地頭於諸國、以掌兵。每段課五升以調食。而天下一變矣。世知源賴朝之雄略、蓋世能創此業。而不知所以能成此業。自有其本也。觀其奏、蠲所領九國逋租、因請諸國準之又奏。兵興以來、民不暇農。關東疲弊殊甚。自今量民力、收賦稅。嗚呼、當是時、天下方貴驍虓之將、喜進取之功而已。而賴朝獨滋滋以養民爲務。可謂知

〔初建〕 初ハ前ト同ジ、ハジムル意。

〔麗都〕 都ハ「ミヤビヤカ」ナル意。

〔裔〕 音「エイ」衣ノ「ス」ソ「フ」云フ。

爲政之本矣。唯然、是以能歲歲出師、一舉殪義仲、再舉殪宗盛、三舉夷秦衡、四海之內、一草一木、無不靡從其風。以遂初建無前之大業。其本在於此。曰、在於此而已乎。曰、未也。賴朝嘗見侍臣衣服麗都。曰、汝不見千葉常胤土肥實平等所自奉乎。彼其志在多養兵卒、爲國建功。汝小臣乃敢爾。命取刀、親截其裔。夫賴朝戒小臣、引常胤實平己之所領。雖什百倍常胤實平、而不敢奢侈。可知矣。是其所以當多事之日、能蠲逋租、養民力、而不患不足。

〔德〕 奪ニ同ジ。

也。賴家實朝坐享其業。蓋不能然。能然者乃北條氏。所以盛衰相效也。

逋租。 剗建。

〔三五〕 賴朝善用用人

〔備〕 「ツテサニ」ト訓ズ。

賴襄曰。源賴朝深知天下之形勢。其經營天下。備有次第。大要不自用。而用人也。其起於東國。躬被堅執銳。與敵血戰者。石橋一役而已。親與平氏對

〔魯〕 隙ナリ、「スキマ」ノ意。

〔伊勢氏〕 伊勢長氏ノコト、後ニ北條氏ヲ目ス。
〔中原〕 國ノ中部、即チ京畿ヲサス。

〔制〕 自由ニスルコト。

軍者。富士川一次而已。已而入據鎌倉。用八州豪傑。以自衛。蓄力養威。以觀天下之釁。未嘗輕用其兵也。及源義仲起。則一自將大兵臨之。徙其跡於北陸。何哉。八州雖形勝之地。不得甲信。則不成國。後世伊勢氏擅八州。而不得一西。其鋒者。甲信爲人所塞也。賴朝蓋知之矣。已得信濃。出兵中原。易也。而不肯出。使義仲試之。義仲百戰。挫平氏之鋒。而其鋒亦少鈍矣。於是賴朝徐起。以制其後。故用力約。而收功倍。是義仲亦爲賴朝所用。猶其用範

〔向〕「サキニ」ト訓ズ。

賴義經也。故賴朝善用人而已。收其功者也。其用
範賴義經也。猶向之用義仲也。是以既收其功矣。
則殺所用者。無足恠者。

被堅執銳。中原。

〔二六〕 賴朝除所忌

賴襄曰。經營天下。建立大業者。誰不欲使其子孫
長守之哉。於是爲除其所忌者。以託之所信者。人

〔相制〕 互ニ治ムルコト。

〔舊部曲〕 元ノ部下ヲ曰フ。

〔妻父〕 北條時政ヲサス。

人皆然。雖然。當信者。未必可託也。當忌者。未必可
除也。並存當信當忌者。以使相制。是可謂之善慮
子孫已。源賴朝藉父祖餘威。爲其舊部曲所擁戴。
終得總海內之兵權。故忌其同姓。恐其亦爲吾所
爲也。如弟義經之威名著軍中。最其所忌也。故決
意除之。不必待柁原景時之讒而然也。而後託其
子於妻父。以爲在彼亦爲外孫。吾雖死。當代吾以
扶植之。是真當信當倚者也。嗚呼。亦何圖子孫之
死其所信倚者手哉。

相制。擁戴。

〔二七〕承久之事未得其謀

承久之事、以陪臣放流天子、天地反覆論者皆曰、後鳥羽上皇之非舉、自取禍敗、北條義時不得已而犯闕、廢無道之君、以安天下、噫、假使此事克乎、則曰、王師東伐、強藩伏誅、盛德大業、光前垂後、故彼因成敗論事者、必顛倒天下之是非、不可以不辨、賴襄曰、上皇可謂有志之君矣、雖然、苟有此志、非

〔放流天子〕後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ土御門上皇ヲ土佐ニ順德上皇ヲ佐渡ニ流シシコト。

〔光前〕光ハ「照ラス」ト謂ズ前代ヲ輝ス意。

〔延攬〕音「エンラン」ヒキトル意。

〔遊養時晦〕道ニ遊ヒテホヲ養ヒ時勢ニ應ジテ言行ヲ晦マスコト。

〔泄沓〕緩カナル意ニシテ怠慢ナルコト。

憂思勤厲、延攬英雄、遊養時晦、觀釁而動、不可庶幾萬一也。乃游宴泄沓、耀區區之膂力、至自鑄刀劍、其所共謀、非嬖寵公卿、則逋逃將校、信其從諛、輕舉妄動、而欲以圖天下之老姦巨猾、難矣。故吾以上皇爲有志而無謀也、如其舉則不非也。此而不舉、坐視王權之日去、放祖宗舊物、而不恤可乎。曰、未得其時也。東藩雖乘亂攘權、然既建立此大業、天下莫不畏其威服、其恩而欲以空拳擊滅之、當時已有以此諫之者。是未得其時也。襄又以爲不然、曰、王師滅東藩、唯此時爲然。所謂觀釁而動是已。烏謂之未得其時乎。吾特惜未得其謀。

〔觀釁〕實朝害ニ遭ヒシコトヲサス。

〔陰殺其主〕 顧家・實朝ノ害セラレシヲ云フ。

〔誥旨〕 勅諭ノ趣旨、誥旨「カウ」上ヨリ下ニ告グル意。

〔十九萬人〕 東兵西ニ下ル者十九萬人故ニ云フ。
〔倒其戈〕 ウラギルト。

耳。何哉。夫建此大業者非源氏乎。天下之所畏源氏之威也。所服源氏之恩也。北條氏所以專權者以外戚源氏也。而陰殺其主者再矣。有心其主者因事誅鋤之者數矣。關東將士皆知其心跡而莫敢言。其間豈無慷慨憤激欲起而擊之者哉。特懷其食邑顧其妻子危疑相仗莫能先發耳。當是時使朝廷有智謀之士改其誥旨不曰滅關東而曰復源氏則此輩勢不得不變爲我徒。十九萬人可使倒其戈也。曰如此北條氏可滅源氏不可不復。而王權可收乎。曰我滅之我復之。德在於我矣。則權亦在於我。

遵養時晦。觀變而動。區區。輕舉妄動。空拳。

倒戈。

〔二八〕 廣元用人成我事

賴襄曰抱濟天下之才而不之用士之所以爲不幸也。雖然用之而不得其當不幸有更甚焉。不若不用之爲愈也。夫吾才不可自用也則必求天下有力之人借其力以濟天下。是之謂用人以成我

〔滔天之惡〕滔ハ「ハビ
コル」意、天ニハビコル
程ノ大ナル惡ヲ云フ。
〔天下之戮〕戮音「リク」
「殺ス」罪ノ意、天下
ノ罪人ヲ云フ。

事以成我事而不暇擇其人之善惡得善人可矣。或遇惡人勢不可中止則其所成無往不惡惡之大小隨才之高下才下則其惡小才高則其惡大以蓋世之才濟滔天之惡不爲天下之戮者鮮矣。吾於大江廣元見之保平以還天下大亂廣元爲源賴朝所收進其計畫以致平定世以爲賴朝之用廣元吾以爲廣元之用賴朝也承久之役北條泰時由廣元之策以靖其難亦廣元之用泰時也。夫賴朝之舉事不過欲撫父祖之舊據有一方面而

〔椎朴〕椎音「ツキ」鈍ナ
リ、朴ハ質ノ意。

〔說〕悅ニ同ジ。
〔撤〕兵ヲ召ス文「フレ
ブミ」。

〔齟齬〕クヒチガフ意、
ココハ反對スルコト。
〔泛然〕浮ブサマ、何レ
ニモツカザル意。

其下皆粗猛椎朴知效力戰鬪而已及廣元持大計往而教之始說而從之北條氏得京師檄欲退守八州非廣元決策天下之亂何所底止非廣元用此輩而何乎蓋廣元之才足以濟天下而不爲朝廷所知也則不得不借關東之力以展之苟借其力以濟天下吾事成矣彼源氏北條氏一起一仆於我何有哉是以賴家失行而不肯諫實朝陷禍而不肯救時政義時之謀篡竊而不肯齟齬泛然中立自免於禍世不原其志所在而咎其負於

〔桀黠〕 平「ケツカツ」ワ
ルガシコキコト。

〔附會〕 コジツクルコ
ト。

〔業〕 「スデニ」ト調ズ。

源氏過矣。吾獨惜其所用以展其才者非其人也。廣元獨非王朝世臣乎。莫已知則斯已。急於借人之力而不知其助盜賊也。微廣元賴朝亦一桀黠將帥而止耳。何至坐攘王權如此哉。承久之役流竄帝王。政行悖逆亦非秦時輩所能辨。待廣元附會故例。處分裁決。然後奉而行之爾。夫業已用是以成吾事。是人之敗。敗將及己。故不能不竭力扶之。勢之必至。無足恠者。而其罪遠出源氏北條氏之上。廣元蓋悔而不及也。可不惜邪。

蓋世之才。滔天之惡。檄。底止。桀黠。

〔二九〕 後醍醐厲精

賴襄曰。後醍醐即位之初。厲精政治。舉行恤民之典。而關東多秕政。人心不服。朝廷與東藩勝負之勢。不待交兵刃而決矣。夫鷲鳥欲搏。必斂其翅。不斂其翅。而露其搏擊之機。適足以困敵已。正中元德之際。不其然乎。同謀公卿武人。既見囚執。使北

〔秕政〕 惡政ヲ曰フ、秕
音「ヒ」穀實ノラザルコ
ト。

〔鷲鳥〕 猛虎ヲ曰フ、鷲
音「シ」。

〔公卿武人云々〕 貴朝・
俊基等ノ關東ニ囚ヘラ
レシコト、是レ正中元
德ノ頃ニアリ。

條氏更究詰本源，豈不危殆。帝之下誓書於關東，雖治龜山之例，其爲計可謂窮且醜矣。及東吏再來，又用苟且詭詐之謀，僥倖一時。雖有智勇忠義之士，施其謀略，而機會皆失，不能救其蒙塵也。幸而投賊之衰運，得義旗四合，纔致歸闕，反正耳。向使帝藏其鋒，養其銳，舍圖賊之謀，而益務自治之術，賊已失人心，叛者驟起。俟其罷極，擠其將墜，用力寡而無後患，何必曰兵哉。且使帝不能已於兵乎。如楠正成，近在畿甸，及其平時訪求諮謀，必有

〔苟且詭詐〕「カリソメ」「イツハリ」
 〔智勇忠義之士〕楠正成
 フサス。
 〔蒙塵〕天子ノ外ニ通レ
 タマフコト。

〔罷極〕罷音「ヒ」疲ル、
 コト。

萬全之策，寄行在於形勝之地，以招聚四方之豪傑，其知義效順，與欲釋憾於北條氏者，將雲合霧集。天下之事，可以指顧而定矣。

〔指顧〕速ナル意。

秕政。鷲鳥欲搏，必斂其翅。蒙塵。雲合霧集。

〔三〇〕中興之政失乎

中興之政失乎。賴襄曰：政不失也，而所以爲政者失矣。所以爲政者何也？曰：人主之心是已。謂其意欲太廣，好侈喜大乎。

〔中興〕建武中興ヲサ
 ス。

〔贏・項〕 贏ハ秦ノ姓、項ハ項羽。
 〔荃刈〕 音「サンカイ」ルコト、滅ス意。
 〔韓彭英盧〕 韓信・彭越・英布・盧縮ヲ曰フ。
 〔冒頓〕 匈奴ノ單于（酋長）ノ名。
 〔蕭何〕 漢ノ相。
 〔惻惻〕 オソルルサマ。

〔幸〕 「コヒネガフ」ト訓ズ。

〔抵牾〕 音「テイゴ」クヒナガフコト。

曰否吾以爲其欲不廣所喜不大耳昔者漢高祖滅贏斃項百戰有天下猶躬被堅執銳戈刈韓彭英盧之類至與匈奴冒頓戰見蕭何營宮室怒曰天下恂恂成敗未定何爲此等世謂天下既定矣而高祖則曰未也推其爲心非盡掃蕩天下可慮者不充其所欲也稱高祖曰大度謂其心之大如此爾今帝纒斃一狂童之高時則謂宇內無復足慮者是以遇足利尊氏之降則遽寵爵之以幸其可倚纔得歸闕即晏然燕息以營宮室爲急雖有記錄所蓋不數親臨內敕所令與外廷指揮每與抵牾武人之邑往往爲內官私給憤怨思亂

〔內官〕 宮中ニ仕フル役人。

〔困踏〕 踏音「ホウ」又バ「イ」仆ルコト。

〔溪壑之欲〕 飽クコトヲ知ラザルノ欲。

固其宜也使帝之心常如元亨以前而不加建武以後則縱使政事少有所失而不至再取困踏也唯夫其心不大其量易滿故當其未得則勤勵及其已得則懈怠待天下之群雄苟充其欲適其意以冀無事其少欲者安於此矣至其姦豪者溪壑之欲愈予愈不充非盡奪我業則不已彼之心乃大於我我何以能制彼哉

抵牾 溪壑之欲

〔三一〕京師之形勢

賴襄曰、孫子論兵、以道爲先、天地次之、將法又次之、元弘之能勝北條氏、由彼之失道、而延元之不
 能勝足利氏、由我之失道、道失則人心背、人心一
 背、天下糜沸、雖有將帥智勇什倍足利氏者、莫之
 能戡、況朝廷使用之、乖其宜乎、而乖其宜者、失地
 利爲最焉、夫地利之於兵大矣、楠正成之初舉義、
 以一城受百萬兵、而不屈者、據險固也、否則元弘
 之績、不可得而成也、況於延元、既失其道、又失其

〔糜沸〕糜ハ粥ノコト、
 粥ノ煮エ湯ノ沸ク意ニ
 テ亂レ騒グヲ云フ。

〔故常〕舊習ヲ云フ。
 〔大故〕大事ニ同ジ。

〔東伐〕北條時行ヲ討タ
 シメシヲ云フ。
 〔錯〕「アヤマル」ト訓
 ズ。

地利、何謂失地利、曰、京師形勢、本不及關東、故北
 條氏足利氏、皆據關東爲巢窟、以能制朝廷、而朝
 廷習於故常、常以得失京師爲大故、故論足利尊
 氏之功、居新田義貞之上者、以爲尊氏能爲我取
 京師、使我歸闕復位、義貞之覆鎌倉、不必切我利
 害也、夫遣尊氏東伐、如放虎於其穴、固大錯矣、及
 遣義貞討之、如探虎穴、固難必於勝、義貞無他奇
 道、而平行東海、轉戰千里、遇賊於險、宜其敗、奈何
 遽召還義貞、以成賊追擊之勢乎、是非亦恐失京

〔海濱〕 濱ハ海邊ノ埋立地ヲ云フ。

〔勦殄〕 殺シ盡スコト。

〔振旅〕 戰克チ兵ヲ整ヘテ還ルコト振ハ整、

旅ハ「モロモロ」ト訓ズ。

〔雍容〕 ヤハラゲルサマ、ユツタリ。

〔白旗之險〕 播磨ニ在リ。

〔郊甸〕 畿内ノ郊外ヲ曰フ。

〔見卒〕 アリアフ兵。

師故耶。及賊取京師、官軍再戰得克之、賊既遠離其巢、無穴可入、而棲泊海濱、不於是時急勦殄之、而唱凱振旅、使其雍容上船樓、西兵復來、誠不可曉也。世咎義貞之遷延失機、吾以爲是亦朝廷之意、以既得京師、不必復恤、縱敵故召還諸將也。賊則據白旗之險、以梗官軍、而得以其間成、再燃之計。朝廷至此不聽正成幸叡山之策、促禦之於郊甸、令以見卒格鬪平地、棄正成而不察者、亦憚再舍京師也。及敗方行其策、晚矣。然亦可固守焉、以

〔太湖淀水〕 琵琶湖ト淀川ノコト。

〔傾仄〕 仄モ傾クコト。

〔聽〕 任スト訓ズ。

爲後圖矣、乃聽賊僞和、又棄義貞而不顧者、亦喜於歸京師、而未暇慮其他也。噫、其重京師也如此。何知其形勢之劣、萬難守哉。夫太湖淀水之固、天設以爲大和、非爲山城也。山城當屬山陰者也。叡山支太湖、使之曲行、山城其大麓餘地耳。故迫狹傾仄、守之以防外寇、如在堤下、與堤上人鬪。故有一寇來犯、非舍而上叡山、不可守也。或逃於江、或避於丹、聽寇入京、還而攻之、寇亦不能守。足利氏十三世亦每如此。

如放虎於野。不入虎穴，不得虎子。(後漢書)

〔三二〕 正儀之深謀

楠正成與子正行並盡忠王室，身殉國難。而正行之弟正儀繼任大將，終叛降於賊，辱其家聲而不恥。幾乎無人心者矣。中興諸將忠義無出楠氏右者。諸將子孫未有降賊者。而楠氏如此。且諸將散處東西，為聲援而已。藉使叛降，未必切行宮利害。

〔任大將〕左兵衛督ニ任セラレシヲ云フ。

〔幾〕近シト謂ズ。

〔藉〕「タトヒト謂ズ。」

〔藩屏〕垣ノ意ニテ守衛ノコト。

〔志乘〕志ハ誌ニ通ズ乘ハ史、歴史ヲ曰フ。

〔徵〕證スルコト。

楠氏世為南朝藩屏。南朝得以抗強大之賊。咫尺間而不亡五十年者，以楠氏在焉。一日無楠氏，是無南朝也。正儀為王室之倚賴如此。而舍而降賊，與其臣僕比肩而不恥。孰謂正成之子正行之弟而有此禽獸耶。為楠氏惜者，謂之虛傳矣。然北朝志乘顯然載其年月，不可滅也。且其族不義之而攻之，北朝為出援軍，與王師戰。其跡亦不可揜也。賴襄曰：吾嘗紀楠氏之事，徵之南朝舊志，而散亡不詳。故不敢斷其虛實。曰：正儀蓋有深謀焉而已。

〔解〕「アキラカ」ト謂ズ、二一章ニ出ズ。

〔後一歲〕正平二十四年ノコト。

〔其子弟〕建徳元年賴之義子賴元ヲ遣シ正儀ヲ授ケテ入寇セシム。

已而反覆考之、雖未能覈其實、如有差得其情焉。何以得其情、曰、亦因其跡與年月得之也。後村上之正平廿三年帝崩、長慶即位。先是一歲、北朝以足利義滿爲將軍、細川賴之輔焉。後一歲正月、正儀降、先見賴之、遂見義滿。其三月、和田氏族攻正儀。自是連年攻討、賴之請救之。諸將不肯、賴之恥其言不行、欲辭其職。乃發兵、而以其子弟爲將。後戰鬪之事、無所見。十二歲、及後龜山之天授弘和間、賴之遭讒、見斥。而山名氏入寇、連陷河紀諸城。

〔十年所〕所ハ許ノ意。

〔解〕止ムルト謂ズ。

而正儀歸順、與山名氏戰、敗績。於是南國之屬行宮者、獨存吉野而已。後又十年所、正儀蓋既沒而賴之再任職。乃誅滅山名氏、間歲、而南北之和成矣。初正儀數受命攻京師。細川清氏之降、行宮請攻京師也。正儀以爲不可、曰、取京師、臣一人力可辨。何借清氏、唯恐既取復失、恥之強戰、併我所有失之、宜養威力、徐圖匡復。是可以知正儀之本意矣。而賴之亦有弭兵之志、以爲南人所以能數來者、賴於楠氏、欲除南患、莫若和楠氏。是以百方就

議和焉。而正儀之意與之克合。是時長慶新即位。銳意用武。敕東西諸將。一時並起。而正儀仍執前議。是以帝怒。令其宗族攻之。故正儀不能自立。姑爲此權時之計耳。其意如曰。今而與北戰。是自速亡也。然南無我。則莫能戰。北有我。亦不敢軼我。而南故正儀之爲背南嚮北之狀者。是以其一身橫塞南北間。以存南而遏北也。賴之亦知其意。欲因以成前議。不然。何不遂究其南向之兵。而過十年乎。其被讒也。非曰其庇南乎。是以山名氏代之疾

〔權時〕 時ニ應ズル便宜ノ處置ヲ云フ。

〔速〕 招クト調ズ。

〔軼〕 超ユル意。

〔遏〕 「止ム」ト調ズ。

〔庇〕 「覆フト」ト調ズ。カハフシ意。

南其鋒。而南不能支。正儀已失賴之矣。不可與謀矣。是以復背北嚮南。決意防戰。南朝之所以延殘喘十年者。豈非正儀歸順之効哉。自古老成之謀。不合少年推鋒之論。而讒聞入焉。終以被背叛之名者多矣。如近世片桐且元之於大阪。可以見焉。正儀得非亦且元類也。嗚呼。使正儀而誠舍弱黨強圖其富貴也。何以前此爲南朝百戰。不辭其徒勞。而至此忽降耶。又何以降於正平。而歸順於弘和耶。

〔殘喘〕 死ニカ、レル命、喘音「ゼン」イキノコト。

〔推鋒〕 進撃ノ意。
〔讒聞〕 讒言シテ人ト人トノ中ヲヘダテシムルコト。

藩屏。權時之計。殘喘。餘喘。譏問。

〔三三〕 制馭天下恩與威而已

賴襄曰、制馭天下、恩與威而已。恩懷之、而威服之。相待而行。無恩則威不可以加。加之則怨我。無威則恩不可以施。施之則不德我。夫使之怨我、固不可使之不德我、亦何以制馭之哉。足利氏之所以不能制馭天下者、無威而施恩也。夫足利尊氏非

〔制馭〕 擅ニ治ムルコト。

〔失望〕 不滿ヲ懷キテ怨ムコト。

〔遷〕 去ルト訓ズ。〔德〕 「タトヒ」ト訓ズ、若シノ意。

有智勇過人也。特因天下之厭王政、而思武治、欲得一將種門、望最高者、推戴之、各自分利耳。尊氏亦知之、是以割土地、頒金帛、務充其欲、惴惴然唯恐彼之失望、背我而去也。然背焉而去者、足相踵也。而不能禁也。既背復來、不問也。數背數來、坐成強大、不能削也。無佗、彼其初受封得賜、性以為當然、而不以為德。一有不便於己、掉臂而逝、饒使責而讓之、彼必曰、汝已叛其君矣。何以禁吾叛汝哉。是尊氏義詮所以不能責諸叛將也。然既施之以

〔誅厥〕 殺スコト。

〔氏滿〕 姓ハ山名。義弘 姓ハ大内。

〔姑息〕 一時逃レノ事ヲスルコト。

〔藩鎮〕 唐代ノ地方官即チ節度使ノコト。

〔羅列〕 多ク並ブコト。

〔平一淮西〕 唐ノ憲宗ノ元和十二年蔡ノ將吳元濟ヲ平ゲシコト。

〔韓愈云々〕 韓愈ノ平淮西碑ニアリ。

〔倫〕 「タダヒ」ト調ズ。

恩是我之恩也。被我之恩而叛於我。我罰之而有辭。何所恤乎。況彼之所恃以叛我者。土地也。甲兵也。皆藉吾所予。用以反噬我。是可誅殛無釋者矣。是義滿之所以用戈於氏清。義弘而不疑也。足利氏之威。於是始加天下矣。而後其恩能使人德之。非復如前二世也。昔者唐氏姑息。藩鎮叛將強臣。羅列天下。如不可措手者。至於憲宗平一淮西。而諸鎮震懼。恩威並行。韓愈稱其唯斷以成之。義滿雖不倫於憲宗。其斷以成之一也。是故人主患不

〔斷於中〕 中正ノ所ニ斷定スルコト。

〔裴度〕 二一章ニ出ヅ。憲宗用ヒテ淮西ヲ平ゲシム。

斷耳。苟有以斷於中。何紛亂之不可治也。雖然。欲斷之。必先謀之。不謀而斷。其斷不可達。適足以損其威耳。故貴於謀。謀必有所與者。義滿有細川賴之與謀。猶憲宗之有裴度。所以能達其斷也。

缺望。 反噬。 姑息。 羅列。

〔三四〕 正統論

兩統分立五十年。至此而合矣。當其未合。孰爲正

政記論文鈔

〔三四〕 正統論

八七

後深草・龜山二帝ノ兩
統ヲ曰フ。
〔分立〕初メ十年毎ニ兩
統立ノ約アリシガ元
弘二年高時光嚴天皇ヲ
奉ジ延元元年尊氏光明
天皇ヲ奉ジテヨリ北朝
ハ後深草ノ裔、吉野朝
ハ龜山ノ裔其ノ統ヲ承
ケ南北合一ニ至ルマデ
凡ソ五十年。

孰爲閔。或曰神器在南。南爲正。賴襄曰不然。夫神
器之在南宜也。儻使在北。北爲正乎。南之所以爲
正者。不在神器之在焉與否。夫後醍醐天皇爲祖
宗。復仇雪王室之大恥。而猾賊再起。以其不便於
己也。更有所擁立。成兩帝爭統之狀。而已成志於
其間。曰吾非爭天下於天子。天子與天子爭也。天
下之趨利無恥者。靡然服從。亦曰吾仕北朝天子。
非從足利氏也。不知其所仕者。乃足利氏之所門
生視之也。豐仁親王之立也。至當時民間曰王無

〔豐仁親王〕 光明天皇ノ
コト。

〔保隸〕 民ヤ「シモベ」即
チ賤民ノ意。

〔良基〕 關白藤原良基。

一戰之功。而將軍賜之帝位矣。夫如此。假使神器
在於北。得謂之正乎。是以少有人心者。皆相率以
就於南。公卿然。武人然。愚夫氓隸亦然。而況於神
器之靈乎。其不在於北。而在於南宜也。祖宗之所
誘爲也。天道也。而北人強詞求勝之曰。尊氏劍也。
良基璽也。夫無劍無璽可矣。必以賊爲劍。以無恥
無義之大臣爲璽。而謂之朝廷。是忠臣義士之所
以不欲立焉。非以其無劍無璽也。而其立於南朝。
亦非以其有劍有璽也。夫南之俸祿。不如北之利

〔肝腦塗地〕 ムゴタラシク殺サレ肝ヤ腦ガ地ニ塗リ附ケラル、コト。
 〔漸盡灰滅〕 水ノ盡キ火ノ消ユル意ニテ物ノ滅亡スルコト、漸普シ。

也。其官爵不如北之有權也。而相與共其艱難。折首殞身。肝腦塗地。子孫殲於賊手。漸盡灰滅。而不肯背南而嚮北。有識之士患之也。是以舉南北合一之議。欲以慰其心而弭其禍也。抑後醍醐念祖宗濟民之心。不勝其樂位伸欲之志。求成此志也。而使天下之忠臣義士公卿武人愚夫氓隸。被此禍於五十餘年間。祖宗終不右此也。是以終絕其胤。而神器歸於北朝。傳祚無窮。亦天不忘祖宗之德。而眷其裔孫也。及至於此。何必論彼此哉。自天

與祖宗視之一也。而足利氏猶曰。此吾家所立也。彼仇之者也。世之無識者。又追斥南朝。呼其忠臣義士爲國賊。顛倒是非如此。不知忠於南朝者。非特忠於南朝也。忠於祖宗也。微此輩。足利氏不肯顧公議。以戴皇族也。則此輩謂之忠於北朝。亦可也。足利氏滅。而皇統儼在。天下之心。莫不仰嚮。而神器奠安於千歲。此輩亦可以瞑矣。襄故曰。祖宗之意。天人之心之所嚮。爲正統。正統所在。神器歸之。非神器所在。正統歸之。

〔奠安〕 定マリ安ンズルコト。

〔或〕 猶何敬所ヲサス、敬所山陽ノ病ヲ訪ヒ談南北正統ノ事ニ及ビ山陽ト合ハズ山陽病重ク劇談スル能ハズ九月十二日ノ夜腹稿シ翌日之ヲ録シ前編ノ後ニ加フ實ニ死ニ先ダツコト十一日ナリ。

〔誘其衷〕 中心ヲ開導シテ善ヲ爲サシムルコト。
〔瓊尾〕 小ニシテ衰フルコト。

或謂賴襄曰、子之論正統似也。抑子非亦北朝之臣子乎。何不諱曰、何居。子所謂北朝安在。曰、今朝廷是矣。襄曰、於戲、今朝廷者、神武以還大一統之朝廷也。何以曰北。曰、北者、延元元中間、天子南遷、而賊臣私立君。當是時、南則正、北則僞。事南者榮、事北者辱。故不得不別其稱也。已而天悔其禍、祖宗誘其衷、講和議、成南北混一矣。夫以後龜山之瓊尾流離、其授神器也、不肯從降式、必用父子禮。足利義滿之兇威、而不能奪也。於是、後小松始傳

〔器〕 美シキ意。

〔紛紜〕 後小松天皇ノ位ヲ皇子ニ傳フルヤ南朝ノ遺臣後龜山ノ後ヲ立テ約ノ如クセント請ヒシモ聽カレズ兵ヲ起シシヲ云フ。

器受禪、尊後龜山爲太上天皇。事懿禮善、足以盪滌前此分派之陋。上承列聖之統、而下顯示後世。蓋天與祖宗實佑之、非足利氏之所能爲也。雖其後內有紛紜、天命大定、以至於今。賊臣之蟠據輦轂、濁亂朝廷、百餘年者、畢伏誅竄、朝廷復其清明、大其一統、如日月再中天、而山河皆明也。而何苦猶汚其口吻、曰北曰北耶。夫曰北則見其爲足利氏之門生、而以小朝廷自處也。此非臣子之當諱者哉。

肝腦塗地。漸盡灰滅。祖宗之意，天人之心之所嚮，爲正統。口吻。

〔三五〕 足利氏之所以得天下

賴襄曰：足利氏之所以能得天下者，由其多割土壤，與諸將不恪，而所以不能治天下者，亦由於此。尊氏義詮創業於南朝未衰之時，勢不能不然。至於義滿天下戴足利氏之久而南國日蹙，又能戡

〔裁制〕 オサフルコト。

〔嘉吉之變〕 赤松滿祐足利將軍義教ヲ弑セシ事變。

〔應仁之亂〕 足利將軍義政ノ弟義視及其執事細川勝元ト義政ノ子義尚及其執事山名宗全兩黨ノ軋轢ヨリ起リ十一年間ニワタリシ亂。
〔胚胎〕 音「ハイタイ」始マル意。
〔析〕 割クコト。

內亂，威令大振。不乘此時以裁制之，而仍襲父祖之遺習，動輒舉數州，加授將帥，賞而授之，猶可也。又有貶而授之者，豈姑息以希無事乎？抑欲驕而斃之乎？可謂無術者矣。而何以治天下？異時嘉吉應仁之禍，已胚胎於此，不可不察也。夫治天下，譬若縛薪，薪大而少，不若小而多之易束縛也。故縛薪者，逢其大而難縛者，析而小之；治天下者，逢諸侯之大者，亦析而小之。然後可使聽我約束。足利氏不知此術，宜乎其不能治天下也。其於將帥既

〔少子云々〕尊氏次子基氏ヲ以テ關東管領トナシシコト。

〔編〕昔「セン」オダツルコト。

〔義滿云々〕管領滿兼異圖ヲ懷キ大内義弘ノ叛スルヤ陰ニ之ニ黨ス義滿之ヲ討タント欲ス執事上杉朝宗和ヲ講ズ乃チ滿兼ニ授クルニ足利ノ莊ヲ以テス。

然於宗族亦然。尊氏之封少子以八州。強大其力。以制敵國。而鎮壓諸將。亦不得不然之勢也。而其後恃其强大。有圖宗家之意。將帥懷異者。亦翼戴之爲名。足以煽衆心。義滿不能究。纔賴其宰臣。調停之。輒有所加恩。不唯不能殺之。乃豐之如此。將何以制之。

裁制 制裁 胚胎。

〔三六〕應仁之亂何由而起也。

賴襄曰。郡縣之世。患在於姦臣與叛民。而封建無之。非無之也。雖有之。而不至粹亡其國也。何者。諸侯各有其土地甲兵。其力足以內備姦邪。而外禁盜賊也。然其力足以禁盜賊。而備姦邪。故難制。制之以權。權在於上。則天下之勢分。以奉上。令權不在於上。則天下之勢合。而下恣其志。合者。何謂。謂有黨。有黨必有耦。而爭。爭以其土地甲兵。故吞噬拏攫數十年。而不止。非如郡縣之存亡立決也。而爲之上者。既莫以制之。聽其或勝或負而已。而勝者或挾我以取其勝。而及於既勝。

〔粹〕遠ニト訓ズ。

〔耦〕並ブコト、相手ノ意。
〔拏攫〕ツカムコト。

〔應仁之亂〕 九五頁參看。

〔其弟〕 義視ヲ指ス。

〔其子〕 義尙ヲサス。

〔渠魁〕 首領ノコト多クハ惡人ニ用フ。

乃終制我我無如之何。是封建之通患。而應仁之亂亦爲然。何由而然也。曰。喪權而已。何以喪權。曰。不公也。不一也。唯不公。是以不一。自以其弟爲儲貳。細川勝元傳之矣。而復援山名宗全。以軋勝元。其不一也如此。此由欲廢其弟。以立其子也。非不公而何。而天下莫肯復奉其令者。而致兵戈之氣塞天地之間者。十有餘年而不絕。蓋雖義政。始不自知其患之至此也。幸而渠魁兩斃。如無勝負。而細川氏終專其權。至廢置將軍。如奕碁然。群豪相並。海內分裂。至織田豐臣氏。纔得混一之。其禍遠矣。

吞噬。奕碁。渠魁。

〔三七〕 唯患己之得失 (模範訓點)

賴襄曰。孔子論鄙夫之不可與事君。曰。未得患得。既得患失。患失。則無所不至。今細川氏之事。足利氏。志不在足利氏。而患己之得失而已。是以其臣之事之者。志不在細川氏。一彼一此。唯己之得失。是視。而無所不至者。酷相似也。是豈細川氏之罪。

〔一彼一此〕 「イツビイツシ」ト訓ム。或ハ彼ニ就キ或ハ此ニ就クノ意。

〔孔子云々〕 論語ニ出ヅ。〔患得〕 得ザルヲ患フノ意。

也。足利氏事王家也。爭其兩統。以便於己。亦由其志不在王家。而患己之得失。其源如此。宜其末流轉相倣倣也。故三好氏之臣之亂。三好氏猶三好氏之亂。細川氏。三好氏之亂。細川氏猶細川氏之亂。足利氏。細川氏之亂。足利氏猶足利氏之亂。王家。

苟患失之。無所不至矣。論語

〔三八〕兵有形有勢有機

賴襄曰。兵有形。有勢。有機。形生勢。勢生機。機者難見而易變者也。隨時而變。隨處而變。如形與勢。必有大而可見。確而不變者。因其形而制其勢。因其勢而決其機。是將之智也。故智將之所為。或有不謀而合。則其形勢同也。故其機亦同也。吾觀永祿元龜之際。有三大戰。毛利氏有嚴島之戰。北條氏有河越之戰。織田氏有桶峽之戰。此三戰者。皆所以著威天下。以興其業者也。毛利氏織田氏皆以三千破敵之三四萬。北條氏以八千破敵之八萬。世徒稱其以寡敵衆。勝於難勝。而

〔有レ形〕形ハ有様ヲ云フ。
〔勢・機〕二二章ニ出ヅ。

〔嚴島之戰〕元利元就陶晴賢ヲ敗リシコト。
〔河越之戰〕兩上杉氏河越城ヲ攻ム北條氏康小田原ヨリ進撃シテ之ヲ敗リシコト。
〔桶峽之戰〕織田信長、今川義元ノ軍ヲ敗リシコト。

〔註〕「フミニジル」コト。

不深究其所以勝者蓋所以勝之機同也。機之所以同則由於勢與形之同。何以言之。夫陶賊擅防長筑以壓毛利氏之安藝。今川義元略駿遠參以逼織田氏之尾張。兩上杉氏有七州以蹂北條氏之相摸。以強臨弱。客攻主守。其形同也。以形言之。強者勝弱者負。攻者有餘守者不足。然而不足者悞。有餘者驕。驕則怠。悞則奮。則勢也。則其勝負之機將相換矣。雖然。以弱敵強。以不足對有餘。不可徒奮鬪而克也。於是制其勢以決其機。夫有餘者利於分不利於合。分則整合則亂。而不足者反之。彼分其勢更迭攻我。我何以堪之。是以置城

〔更迭〕「タガヒニ」ト調ズ。代ル代ルノ意。

〔梗〕塞グト調ズ。少キ意。

〔攪〕ナマグサキ内。

〔沓蹙〕音「タフシユク」重ナリ縮マルコト。

塞於要衝之地。以梗敵路。使敵合衆敵力於此。則吾所與鬪者約矣。是因形以制勢也。譬若投糝于地。以聚群蟻。敵衆散漫。蔽地而來者。其勢至此沓蹙焉。則吾可以乘其亂。衝突而破之。是因勢以決機也。然可擊之機。其間不容髮。急則末及其機。緩則已過其機。過不及於機。則機之可以勝者。或足以自敗。是則所謂隨時與處而變者矣。是故毛利氏北條氏之用緩。非緩也。織田氏之用急。非急也。其爲不失機一也。間不容髮。

〔三九〕 信長善用地利

賴襄曰、應仁以還、七道分崩離析者極矣。百戰之餘、英雄之才輩出、最成強大者五氏、毛利氏在西、武田上杉與北條氏在東、而織田氏居中。其土壤兵力、莫大相過、而獨稱織田氏、以爲繼足利氏宰天下者、何哉。以先據京師、號令四方也。先據京師、號令四方、足利氏之所以成霸也。及其衰且亂也、徒存其名、莫肯復奉其令、而天下耳目所屬、心意所嚮、猶在於此。是以東國群雄、其志無不欲樹幟

〔輩出〕 多ク出ヅルコト。

〔土壤〕 土地ノ境域ヲ曰フ。

〔宰〕 司ルコト。

〔樹幟〕 音「ジュシ」旗揚ゲスルコト。

〔聲氣相通〕 聲ト氣分ノ通フコトニテ近キヲ曰フ。

耀兵於京師者、特以其所居隔絕、非多經人國、不可達、地勢不便、故莫之能遂也。獨織田氏之國、與京畿聲氣相通、而扼東國之襟喉、故塞他人入京之路、而已先入京。既入京矣、以兵守畿甸、而遂西嚮其鋒。西道之雄、亦不能禦。不唯以其才過人也。地利便也。其知京師四戰之地也、不肯離其巢穴、棲託於此。又知東國之不易仰攻、是以舍之、而先攻易攻之毛利氏、務大其土壤、強其兵力、然後東面治之者、知地勢也。知當時群雄之所不能知、所

以繼足利氏宰天下也。饒使其所居處地勢之便，不知用其利而避其不利，則何能致此乎。則果其才然也。曰：如其用兵之才，非不如武田上杉乎。曰：雖然，自知用兵之才，不如武田上杉，而不與爭，使彼相爭而不暇及我，而我先為彼之所欲為，是其才所以過武田上杉氏也。

聲氣相通。襟喉。

〔四〇〕國之所以治亂興廢

賴襄曰：國之所以治亂興廢，可知已。所以興且治者，由上下之相近，所以廢且亂，出於其相遠。無和漢古今一也。當國之創建也，上意下達，下情上通，歡然無間，而天下治。及其久也，則不然。上之人有其位，負其權，以驕其下，而不恤也。甚則蹂踐之曰：吾天子也。吾關白也。彼武人賤吏耳。而武人賤吏終覆天下，而奪其權。是王家之所以變為源氏，為足利氏也。曰：吾將軍也。吾管領也。彼陪臣與僮耳。

與僮 音「ヨダイ」カゴ
カキ、賤夫ノ意、秀吉
ヲサス。

而陪臣與僥終覆其天下、而奪其權。是足利氏之所以變爲織田氏、爲豐臣氏也。其變者天運也。而必由人事而變。當其未變也、上尊下卑、如天地然。尊者日驕逸、卑者日勤勞。驕逸者日愚、而勤勞者日智。智之極者、足以取天下。而愚之極者、不足以保其身。人事然也。愚者常在上、以役智者、不能久而不變。則天運然也。

陪臣。人事——天運。

〔人事然也〕 人ノ行ニヨリテ斯クナルノ意。

〔四一〕光秀之所以忍於君

識田右府以不世出之略、定二百年難合之天下、事成十六七、而身弑業殞、誠爲可惜。而明智光秀一羈孤客耳、爲右府所擢拔、推食食之、推衣衣之、封土豐足、何苦而至刺刃君腹乎。賴襄曰、嗚呼、雖無光秀、右府未必免於禍也。何以言之。或曰、右府遇臣下無禮、屢罵辱光秀、所以取其怨也。襄曰、不然。夫戰國英雄、其君臣相與、不可以平世之意律也。彼視足利氏、動稱禮式、喜修邊幅也。常嗤笑之。故決壞其藩籬、握手強

〔一羈孤客〕 一人ノ旅人ノ意。

〔律〕 法則トスル意。
〔修邊幅〕 外觀ヲ飾ルコト。
〔藩籬〕 圍ヒノ意、藩籬ヲ決壞ストハ隔テヲ壞ルコト。

〔箕踞〕兩足ヲ投ゲ出シテ坐スルコト。
〔得死命〕其ノ命ヲモラフコト、即チ命ヲ捨、君ニ盡サシムル意。

〔鏑滅〕鏑ハ刺ト同ジ音「サン」削ルコト。

酒箕踞嘲詈、以結其歡、而得其死命。遇諸將皆然。何獨施之於光秀。光秀亦何以此爲怨哉。且受恩如此之大。見其無禮、亦宜忍而受之也。不忍於屈己、而忍於殺君。所忍者小、而所忍者大何耶。蓋所忍大者、所不忍亦有大者也。非受無禮之類而已也。右府百戰鏑滅四方故家、而以己功臣代之。然視其難取也。故蓄於與之矣。而不可不與。不與則彼不爲我用也。故姑與之、使彼爲我用。然後因事除之、以奪前所予。或舉其舊惡。如林通勝佐久間信盛是也。或誣其有反心。如荒木村重是也。右府初許村重、以取攝津。自封而聽讒、誅之。讒

〔組織〕讒ヲ構フルコト。

之者即光秀也。光秀亦知右府聰明非惑於讒者矣。而敢組織之者、知右府心在於誅而奪之也。誅村重而奪其攝津。不待吾言之畢、則安知不誅吾而奪我丹波。亦如村重也哉。而吾可忍而待之乎。是光秀之所以先忍於君也。大凡人之感、恩不在其跡、而在其意。意誠欲施之、雖不能施、而人感戴之。意非誠欲施之、雖能施、而人不德之。甚則反怨之。況既施而又奪之。其取怨也、甚於未施之前矣。嗚呼、可不思哉。

修邊幅。箕踞。得死命。制死命。

〔四二〕 太閤善駕馭群雄

〔駕馭〕 思フマヽニ使フコト。

〔市〕 商賣スル意。

〔偃然〕 驕ルコト。

賴襄曰、駕馭天下之群雄、使其盡爲我用、而不我叛者、何以致之乎。與土地金帛、不嗇乎。授高爵顯位、不惜乎。曰、皆不然也。夫徒恃土地金帛、以與之市、我之土地金帛有盡、而群雄之所欲無極。以有盡而供無極、則我之術有窮時矣。且彼攫我之土地金帛而去、不肯爲我用、我欲驅而使之、彼偃然不應。我指呼甚、則資我所與、以抗於我。我何以制之。至於爵位、本虛器而已矣。而人欲得之者、以我

不濫予之也。濫予之、則輕矣。人將唾而不顧矣。是亦不可恃也。故徒恃此二者、欲以駕馭天下、天下將反駕馭我。世稱豐臣太閤之能駕馭群雄、以爲恃此二者。嗚呼、使太閤果徒恃此二者、則足利尊氏是已。足利氏之將帥、皆庸才耳。而猶不可制。方太閤之時、其布列天下者、概希世之雄也。而欲用尊氏之所施、誰肯爲其用。而不敢叛哉。所以肯盡爲其用、而不敢叛者、必有術焉。曰、中其意也。曰、出其意之外也。中其意、足以感喜之。出其意之外、足

以畏服之。天下之群雄感喜畏服於我。我之於天下。何爲不成。何欲不致。是太閤之所以鼓舞顛倒一世。而使其不自知其何故也。故有及時輒予者。有未當與而與者。有當與而不與者。有既奪而大與者。有分與而鬪之者。故太閤善用土地金帛爵位。以濟其術。非專恃土地金帛爵位也。

虛器。庸才。

〔四三〕 織田豐臣善收用兵之利

善用兵者。可以取天下乎。賴襄曰。不可。天下者大物也。用兵小術也。小術不可以取大物。故能取天下者。未必善用兵也。雖然。兵何爲而用耶。非欲以拓土地服人民乎。有人於此。諳結陣之法。練行師之術。巧奇正之變。譎詐之計。而無益於拓地斬首幾千。流血幾里。曰。吾勝矣。可謂之善用兵乎。善用兵者。善收用兵之利之謂也。故善收用兵之利。則術亦大矣。故其用兵。可擊則擊。不可擊則不擊。可

〔奇正〕 敵ノ不意ヲ襲フヲ奇ト謂ヒ相會戰スルヲ正ト謂フ。

〔級〕首ノコト。

進進可也。可走走可也。獲級可也。空手還可也。要

歸於收其利。而收其利之極。極於取天下。是織田

豐臣之術。所以過武田上杉也。武田上杉巧於用

兵。而拙於收利。織田豐臣拙於用兵。而巧於收利。

右府之用兵。猶有巧之可見。而亟用亟輟。所收不

償所用。至太閤。其用兵。無有他繆巧。而天下莫能

支吾。何哉。曰。彼僥倖而得之。蓋有命焉。故不必善

用兵。而能取天下。襄曰。不然。物之小者。猶不可僥

倖而得。況其至大者。非其術之高於一世。烏能得

〔右府〕信長ヲサス。
〔亟〕「シバシバ」ト調
ズ。

〔繆巧〕入り組ミテ巧ナ
ルコト。

〔支吾〕一〇章ニモ出
ヅ、サ、ハル意ニテ、
邪處スルコト、手向フ
コト。

〔稱〕計ルト調ズ。

〔相〕見ルト調ズ。

之哉。太閤之用兵。如無巧者。而其實天下之至巧

也。夫用兵者。決其勝於既用。不如決之於未用也。

決於既用者。不能不亟用。亟輟。決於未用者。不用

已。用則必收其利。不收其利。不肯用也。稱強弱之

度。算成敗之數。相其可而後動焉。得謂之僥倖耶。

奇正之變。僥倖。

〔四四〕勝負之大機

賴襄曰：兵所以勝負者，機也。機有大者，有小者。小者一日而萬變，非臨陣相敵，不可決也。至於大者，決之於舉事之前，而萬衆之心乘之而奮，以至事平之後，其鋒未嘗鈍退者，此機也。得此機則勝，失此機則負。是英雄之所獨見，而衆人或莫之能知者。豐臣太閤西伐島津氏，東伐北條氏，舉兩大役，而天下定。以強加弱，以大臨小，宜若直往而無不可也。而必以文告先之，諭以順逆，彼不肯聽也。又諭之，又不肯聽。而繼以慢辭，然後乃下令伐之。其

〔慢辭〕 無禮ノ辭ヲ曰フ。

〔入觀〕 謁見スルコト。

〔亡狀〕 音「ブジヤウ」無禮ノ意。

〔暴揚〕 サラスコト。

論北條氏也。彼有所要求，曰：得之則入觀。諸將皆怒曰：彼亡狀，盍速擊之。太閤曰：未也。如其所求與之，與之而彼猶不來也。於是乎絕之，暴揚其罪於天下。天下皆曰：彼誠有罪，伐之，不得不伐也。我將士皆有怒彼之心，而彼之國人皆無拒我之意。無拒我之意者，不直其主之所爲也。嗚呼！是勝負之大機也。今有兩人鬪於此，其一倨慢無禮，罵詈雜加。其一卑辭屈躬，欲謝而止之。乃益咆怒，不肯聽。至撫劍疾視，然後不得已而鬪。不得已而鬪者必

〔咆〕 吼ユルコト。

政記論文鈔

勝數十萬人之鬪。與兩人之鬪。其勝負之機。奚異哉。諸將不知而太閤知之。宜乎其全勝也。而何獨於擊朝鮮。而不察於此乎。朝鮮與我隔絕大海。本不相干涉。彼未嘗啓釁於我。而我無故擊之。是以我將士無怒彼之心。而不直。太閤之所為。曰。何故擊之。何故使我裹瘡痍。離妻孥。遠涉大海。而暴骨於未嘗識之地乎。是其所以一勝。而其鋒遂鈍。退不振也。其國人皆怒我。而我拒我。我何以勝之哉。不特無以勝之也。又失我既定之天下。兵之勝負。其

〔裹瘡痍〕「キズ」ヲ包ムコト、内亂ヲ平ゲテ疲弊セルヲ忍ブニタトフ。

機在於此。得天下。與失天下。其機亦在於此。

入觀。亡狀。干涉。裹瘡痍。

下篇 日本外史論文鈔

〔一〕 武門武士 〔模範訓點〕

外史氏曰、吾讀舊志、見鳥羽帝時、數下制符、禁諸州、武士屬源平二氏、曰、大權之歸將門也、其在此時、歟、及讀三善清行封事、陳宿衛豪橫之患、乃知制度之弊、其來久矣、非亶始於此也、蓋我朝之初、

〔舊志〕 二頁ニ出ヅ。

〔制符〕 詔書ヲ曰フ。

〔將門〕 武門ニ同ジ。

〔三善清行云々〕 上篇一

七章ニ見ユ。

〔宿衛豪橫〕 宿衛ハ六衛

府ヲサス豪橫ハワカ

マ、ハ、ナルコト。

以上第一段

〔褊裨〕 副將軍ノコト。

〔肅慎〕 「ミシハセ」又「アシハセ」黑龍江流域地方ニ在リシ國。以上第二段

〔尺一之符〕 詔書ヲ曰フ。漢ノ制一尺一寸ノ木板ヲ用ヒタルニヨル。

外史論文鈔

〔一〕武門武士

建國也、政體簡易、文武一途、舉海內皆兵、而天子爲之元帥、大臣大連爲之褊裨、未嘗別置將帥也。豈復有所謂武門武士者哉、故天下無事、則已有事、則天子必親征伐之勞、否則皇子皇后代之、不敢委之臣下也。是以大權在上、能制服海內、施及三韓、肅慎、無不來王也。及至中世、摹倣唐制、官分文武、乃特置將帥、六衛之將、將天子親兵、而兵部居八省之一、雖不及上世之旨、其防亂慮禍、可謂密矣。是故有事、則下尺一之符、數十萬兵馬立具。

〔卒伍〕 兵士ノ郷土ニ在ル者ヲ謂フ。

以上第三段

〔不擬〕 アテガハザルコト。
〔庶僚百揆〕 百官ノコト。

以上第四段
〔疆場〕 邊境即チ國境ヲ云フ。
〔寶龜中〕 光仁帝ノ時ノ年號。

〔貞觀〕 清和帝ノ時ノ年號。
〔延喜〕 醍醐帝ノ時ノ年號。

而平時散歸卒伍。爲之將帥者、或自文吏出、臨兵陣、畢事而歸、脫介冑而襲衣冠、未嘗有所謂武門武士者也。及藤原氏以外戚、世執政權、卿相之位、非其族人、不擬。官論品流、因習成俗、庶僚百揆、概世其職、而將帥之任、每委源平二家。於是乎始有武門之稱焉。光仁桓武之朝、疆場多事、寶龜中、廷議汰冗兵、殷富百姓、才堪弓馬者、專習武藝、以應徵發、其羸弱者、皆就農業、而兵農全分。至貞觀延喜之後、百度弛廢、上下隔絕、奧羽關東之豪民、以

〔舍人〕 國調トネリ、天皇皇族等ニ近侍シ雜役ヲ掌ル又臣下ニモ賜ハル。ココハ衛府ノ舍人ノコト。
〔六軍〕 天子ノ軍ヲ曰フ。
〔猛獸〕 猛獸ノ名、勇士ニ譬フ。
〔豺狼〕 民ヲ害スル凶暴ノ士ニ譬フ。
以上第五段
〔自從〕 「ヨリ」ト訓ズ。
〔馴致〕 次第ニ移リ行クコト。

〔勳誅〕 昔「セウチユウ」伐チ殺スコト。
〔恬熙〕 昔「テンキ」安樂ノ意。

軍功至六衛舍人者、或坐制鄉曲、不勤宿衛、而守令莫之能制、清行所謂非六軍、猛獸而爲諸國豺狼者、所在皆是。平居藏甲蓄馬、儼然自稱武士、於是乎始有武士之稱焉。自從天慶、馴致寬治、源平二氏數鎮東邊、每用此輩、以奏功效、而各有所習、用以相隸屬、因襲之久、如君臣、然自是其後、苟有事、輒命之二氏、二氏各發其隸屬、赴之如探物、於囊不復煩、選將徵兵、而討伐勳誅、莫不立辨、廟堂之上、務取恬熙、不憂其勢之積重、不回方且延爲

以上第六段
 「爪牙」 輔ケノ意。
 「相傾排」 廟堂ノ上ニテハ藤原氏武門ヲ味方トナシ互ニ押シ倒シ合ヒヲスルコト。
 「梗命」 梗音「カウ」塞ダ意。
 「箝制」 オサフルコト、箝音「ケン」首カセノ意。
 「控馭」 自由ニアツカフコト。
 「苟媮」 音「コウトウ」一時逃レヲスルコト。

爪牙以相傾排而已。鳥羽之下此令也。如察其弊者焉。而不窮弊之所由。於救之之術。蓋已疎矣。當是之時。源氏有梗命者。勅平氏討之。平氏有難制者。令源氏誅之。更相箝制。以爲得控馭之術。而不知異日搏噬攘奪之禍。又基於此。敗壞古制。苟媮一時。皆足以自取困蹙也。抑戎事民命所繫。而兵食之權。不可一日去國。先王之必躬親之。其旨深矣。吾作外史。首敍源平二氏。未嘗不歎王家之自失其權。而國勢之推移。有非人力所能維持者。因

以上第七段

世變以見得失。後之憂世者。將有以留心焉。
 庶僚百揆。馴致。因襲。搏噬攘奪。

〔二〕 平氏

外史氏曰。自我先王之開國也。非無僭亂之臣也。而未有謀危社稷者。獨有一將門焉。而出於平氏。豈非其宗之大恥哉。然能討滅之者。亦出於平氏焉。則足以相償矣。且自將門一伏誅。而後世無復

〔亦出於平氏〕 平貞盛ヲサス。

〔覬覦〕 音「キユ」ネラフコト。
〔標〕 「シルシ」ヲ附クルコト。

〔朱紫〕 古ノ尊者ノ服色、高位高官ノ意。

〔邀〕 恩賞ヲ待チウケルムルコト。

〔相家〕 藤原氏ヲサス。

覬覦神器者、可謂彼以其身標天下大戒也。抑使將門得一檢非違使、則未必甘爲反賊。故天慶之亂、皆相門驕傲、壅塞上下之所致也。當其無事也、籠朝廷名爵於私門、而不恤人之失職。及其急也、乃遽揭朱紫、呼號天下、使天下英雄、有以窺朝廷。後世源平爭起、以功邀其上者、焉知其不基於此也。世稱清盛功不償其罪、舉不臣者、輒以爲稱首。而不知相家不臣、已什倍清盛。清盛蓋視而學之、否則何遽至此。自相門之專權也、后皆其女、天子

〔彼己氏〕 彼ノ人ノ意、藤原氏ヲサス。
〔驚悍〕 音「シカン」タケダケシキコト。
〔大造〕 大功ノ意。

〔名爵〕 官爵ヲ云フ。

皆其女所生、而卿相皆其子弟親屬、苟非其族類、鋤而去之、雖皇族、不能免焉。甚則易置其主、猶視奕碁、清盛所爲、無一不似彼己氏者。而加以驚悍。其意曰、以無功之人、猶擅權寵如此。吾之有大造於王室、何爲而不可。世以其振興之無漸、群起咎之、而不言有爲之師者焉。且清盛所以至此、由後白河帝養成其勢爾。夫名爵公器、不可私用人臣而私名爵、是負其君也。人君而私名爵、是負其先王也。帝濫授先王名爵於清盛、藉以濟其私焉、而

〔假設〕「モシ」ノ意。
 〔戒飭〕音「カイチヨク」
 誠ムルコト。
 〔接踵〕續クコト。
 〔比隆〕同ジヤウニ榮ユ
 ルコト。
 骨肉相食 一族相殺ス
 ヲ謂フ。
 〔孰與〕「イブレゾ」ト訓
 ズ。
 〔閩門〕一門ヲ曰フ。閩
 音「カフ」。
 〔懿親〕睦ジキコト、懿
 ハ美ノ意。
 〔平語〕平家物語ヲ曰
 フ。
 〔悽愴〕音「セイサウ」痛
 マシキコト。

長其負功邀上之心。至於不可制。將誰咎哉。平氏
 除重盛之外。皆不學無術。其矜功擅寵。進不知止。
 曷足尤焉。假設重盛後父而死。盡反其所爲。戒飭
 子弟。輔翼王室。則雖接踵比隆於藤原氏。可也。而
 源氏何資以起哉。源氏名爲治暴亂。而其實攘竊
 王權。源平之罪。未易輕重也。且夫源氏猜忍骨肉
 相食。孰與平氏閩門。至死不失懿親耶。世傳平語。
 倚琵琶演之。其音悲壯。感憤聽者。莫不悽愴。余嘗
 西遊長門。過壇浦。觀平氏覆滅之處矣。又抵肥後。

聞其州有五家山。山谷深阻。平氏或竄匿焉。子孫
 至今猶有存者。不與外人交通云。夫平氏於王家。
 功罪相償。天不必勦絕其後。則是其或然也。

覬覦。朱紫。大造。戒飭。骨肉相食。

〔三〕源氏

外史氏曰。天下之權歸源氏久矣。而源氏不自知
 也。賴義義家經略東北。捍護其民。前後十有五年。

〔賞格〕 賞與ト同ジ格ハ
定例ノ意。

〔官符〕 首ヲ京ニ送ル官
符ヲ與ヘザリシヲ云
フ。

〔喫味〕 音「イクキウ」慰
ムル意、左傳ニ「煨体ニ
作ル痛念ノ聲」
〔柄〕 權ニ同ジ。

〔函嶺〕 箱根山ヲ曰フ。

〔伊東〕 伊豆ニ在リ賴朝
ノ伊豆ニ流サル、ヤ初
メ伊東祐親ニ倚ル祐親
事ニ因テ賴朝ヲ圖ラン
トス賴朝逃レテ北條氏
ニ倚ル。

而朝廷如不關知焉。及其奏功爲將士請賞格遷
延不決。甚而目以私鬪。停之官符。使其以私恩喚
咻之。則是朝廷自舍其征伐刑賞之柄。而付之源
氏。遂令東北豪傑曰。寧背天子。勿負源氏。當是之
時。使義家一唾手起。則函嶺以東。非朝廷之有。不
必待賴朝也。而不敢失臣節。以終其身。乃所以貽
慶子孫也。舊志稱賴朝之逃伊東也。心私祝曰。願
得主關東八國。否則猶領伊豆。得以報伊東氏。由
是觀之。其初念不過割據一隅。而豪傑之素附焉。

〔廷臣〕 大江廣元・三善
康信ヲサス。

〔驟〕 毀ル、コト。

〔制其命〕 生命ヲ支配
スル意ニテ擅ニ治ムル
コト。

〔縉紳〕 公卿ヲサス。縉
ハ挿ム意、紳ハ禮服ニ
用フル大帶、笏ヲ紳ニ
挿ム意ニテ高官ノ人ヲ
曰フ。

〔宰〕 主ル意。

者爭爲之用。兵鋒所嚮。莫不克捷。又得廷臣抱才
而不逞者。以輔其所不及。而會於國家綱紀極隳
之時。碁布所謂素附者於七道。而坐制其命。是雖
其智術有以劫持上下。籠絡一世。則亦時勢之自
至焉。而其源實出於父祖之餘慶焉爾。吾嘗聞之
縉紳之家。鎌倉之興。大江三善之徒。有竊抱民部
省簿記而往者。亦可以見人心所向矣。夫王家自
放失其權。而莫之或收。民安所倚哉。於是王族之
任其器者。代而操之。以宰天下。亦不得已之勢也。

籠絡。餘慶。積善之家，有餘慶。(易文言)

〔四〕北條氏

外史氏曰、北條氏之於源氏、則藤原氏之於王家也。皆不用寸兵尺鐵、而篡其國於衽席之上。何其易也。蓋人情莫不知親其宗、而顧謂不如妻黨之可倚也。於是削弱兄弟、疏斥親族、以爲爲子孫除患害、而不悟其自剪伐、以資異姓、可不哀哉。源氏

〔篡〕音「サン」奪フト謂
ズ俗ニ篡ニ作ル。
〔衽席〕「シキモノ」衽音
「ジン」。
〔妻黨云々〕上篇二六章
ト同旨。

〔懸殊〕ハルカニ殊ナル
意。

〔翼戴〕組織、組織、宗尊
親王等ヲ戴キテ將軍ト
セシヲ云フ。

〔攝籙〕音「セツロク」攝
政ヲ謂フ。

〔權衡〕權ハ秤ノオモ
リ、衡ハ秤ノサホ「ツ
リアヒ」ノ意、天下ノ
政權ヲ曰フ。

政記論文鈔

〔四〕北條氏

一三五

之成國也。固懸殊王家。而其謬計、出王家所未爲。故其受禍、有更烈者。而北條氏之陰謀狡智、乃非藤原氏所及也。鬪其骨肉、剪其手足、潛收默竊其權、而如己未嘗措手。及其得權、亦有所翼戴、而不敢自居。辭其名、而取其實、舍其利、而操其柄、使天下不能議己。子孫守其遺謀、而加以周密、終使帝王之廢立、攝籙之進退、盡取決於己、而如己無所關、不得已而爲之措置。是北條氏家法、所以能長持天下權衡焉。而至於盡心民事、前後武族所罕

〔憐憫焉〕 オソル、サ

〔開然〕 缺點ヲ舉グルコト。

〔鞏下〕 帝都ノ下。

親也。蓋自知其悖逆人神所不容、惴惴焉計以此贖之。而秦時其最者矣。世之論者、於秦時無所聞然已。余謂承久之事、秦時其罪之魁也。何哉。使秦時之賢、果如所傳乎。則既定禍難、擁大兵於鞏下、諸大處分、莫不由己。其於朝廷與幕府、往復之際、豈無所以善處之。已可以理導、又可以勢禁。是之不思、而陷其父於大惡。雖有善政、寧贖其罪邪。是知舊史所稱秦時勸其父、詣闕納降不聽。臨發問遇親征、則何爲。曰、降之。否則決前。皆史氏爲之文。

〔惘喝〕 脅スコト。
〔趙宋〕 趙ハ宋ノ姓。

〔所挾〕 自負スル心ヲ謂フ。

〔接武〕 迹ヲ續グ意。
〔足利氏云々〕 義滿ノ好ヲ明ニ通ジ日本國王ノ稱號ヲ受ケシコト。

過耳。不足信也。然北條氏七世、其可以人理論者、獨有秦時。其他如義時輩、又曷足責歟。外史氏曰、時宗之禦元虜、保我天子之國、足以償父祖之罪矣。虜蓋以其所以惘喝趙宋者、來擬於我。我卻其使不納。未有曲直也。及彼以兵來脅、剪屠我邊疆、則曲在於彼。彼使再來、不可不執而戮之。折彼凶威、定我民志、奪其所挾、而決死待之。可謂深中機宜矣。否則我幾何、而不爲趙宋也。其後唯菊池氏之待明、庶幾接武。足利氏屈膝外嚮、不足言已。豐

〔張皇太甚〕アマリ大ナルコトヲ爲シ、コト。

〔土著〕土著ノ兵ヲ用フルコト。

〔掣〕牽クト調ズ自由ヲ妨グルコト。

〔短兵〕短キ兵器即チ刀劍。

臣氏能不辱國體。勝足利氏萬萬。然至與明戰。張皇太甚。內自困敝。雖攻守異勢。不及北條氏遠矣。北條氏之策。守則土著。不煩徵發。軍須不擾經費。委任將帥。不自中掣之。其戰則憑陸誘寇。走舸逆戰。短兵急接。皆可以爲後世之法也。

寸兵尺鐵。無所聞然。恫喝。

〔五〕元弘之亂

〔鷓鴣〕「フクロフ」他ノ鳥ノ子ヲ捕ヘテ食フニヨリ凶惡ニタトフ。

〔暴悍云々〕粗暴ニシテ「タケダケシキ」者、清盛ヲサス。

〔雄猜云々〕ツヨクシテ疑ヒブカキ者、賴朝ヲサス。

〔三帝〕後鳥羽・土御門・順德三上皇ヲサス。

〔元弘之事〕後醍醐天皇ノ北條高時ヲ討チタマヒシコト。

外史氏曰。予修將門之史。至於平治承久之際。未嘗不嗟筆而歎也。嗚呼。世道之變。名實之不相讐。一至於此歟。古之所謂武臣者。勤王云爾。如源氏平氏。莫不皆然。至平治之後。乘綱維之弛。以逞鷓鴣之欲。有暴悍無忌者焉。有雄猜匪測者焉。雖所爲不同。而其蔑王憲營私利一耳。然猶有可言。曰。王族也。將家也。至於北條氏。以將門屬隸。而坐制朝廷。天下之事。不復忍言也。余聞後鳥羽上皇之徙隱岐也。因石窟縛屋。纒庇風雨。十有九年。乃崩。蓋父子三帝。隔絕千里。各居窮海。終天不得相見。是其心。何嘗一日忘北條氏哉。則元弘之事。

〔西狩〕 後醍醐天皇ノ隱
鼓ニ憑サレタマヒシヲ
云フ。

〔無咻〕 威張ルコト。
〔櫻〕 觸ル、ト調ズ。

〔殄戮〕 音「テンリク」殄
ハ盡スコト、戮ハ殺ス
コト。

〔斧鉞〕 音「フエツ」
ノ「ト」マサカリ「征
刑ノ具。
〔唱〕 導クコト。

萬不可已也。而其勤王之功。余以楠氏爲第一。微楠氏則西
狩之駕。吾見其與承久歸一轍而止而已。何哉。彼北條氏。雖
失於政。其權力有更甚焉。藉累世之威。而加積弱之餘。百萬
虎狼。隨其指呼。魚咻中國。莫之或櫻。天下方以承久爲戒。重
踵屏息。莫敢言勤王之事。而楠公獨以眇眇之軀。唱義其間。
當其衝路。挫其爪牙。以鼓舞四方義士之氣。使之一時踵起。
殄戮元惡。於斧鉞之下。報列聖之深仇。雪累朝之大恥。天下
萬姓。再得仰日月之光。雖曰屬皇運之泰。而非公爲之唱焉。
能至此。是烏知非天生斯人。以匡濟世道哉。而位不滿其器。

〔靖獻〕 忠義ヲ盡スコ
ト、靖ハ安ンズル意、
義ニ安ンジ誠ヲ獻ズル
意。

莫能展其才。而終能以躬殉國。靖獻先王。餘烈所及。不獨其
子孫。自公卿。自將士。各執弓箭。以勤王事。概皆聞楠氏之風
而起者也。嗚呼。如楠氏者。真可謂不愧武臣之名矣。

鳴梟之欲。一轍。百萬虎狼。重踵屏息。斧鉞。

靖獻。

〔六〕 楠氏

外史氏曰。余數往來攝播閒。訪所謂櫻井驛者。得

〔世故〕 世ノ事ヲ云フ。
 〔道里〕 道ノリヲ云フ。
 〔驛程〕 驛カラ驛ヘノ路。
 〔低回〕 思ヒナヤミ行キツ戻リツシテ去リ難キ意。
 〔巖〕 音「ギョク」高キコト。
 以上第一段

〔居然〕 オチツケルサマ、坐シテ動カザル意。

〔擣〕 衝クト調ズ。
 〔渠魁〕 上篇三十六章ニ出

之山崎路。一小村耳。過者或不省其爲驛趾。蓋經足利織豐數氏。世故變移。道里驛程。從輒改耳。余於是低回不能去。願望金剛山巖立雲際。想見公舉義之秋。及其子孫。據以扞護王室也。觀公詣行在。對天子曰。臣而未死。賊不患不滅。夫以一兵衛尉。而居然以天下之重自任。豈非感激值遇。以身詐國哉。故能以赤手障江河。回天日於既墜。何其壯也。公聚北條氏精銳於一城之下。而使新田足利之屬。擣其空虛。以殪其渠魁。帝之復辟。醜爵任

ズ、首領ノ意、高時ヲサス。
 〔復辟〕 辟ハ君ノコト、君位ニ復スルヲ謂フ。
 〔醜〕 酬ト同ジ「ムクニ」ト調ズ。
 〔擣〕 音「キヨソ」處置ノ意。
 〔渠魁〕 下篇一章ニ出

職。宜以公爲首。而纔能與結城名和輩比肩。其失於舉措。足以知中興之無成矣。及足利氏叛。朝廷方倚新田氏爲重。公特充褊裨。供其驅使。亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷。殆致掃殄者。非因公之策邪。嚮使帝以其所任新田氏者。以任於公乎。曷至使犬羊狐鼠之賊。蹂踐吾朝廷哉。然觀其臨死戒子。又曰。吾死天下悉歸足利氏。夫知天下之不可爲。而猶留其子孫以衛天子。其設心雖古大臣。何以遠過。故子孫能守其遺訓。護正統天子

〔彈丸黑子〕 ハジキ弓ニテ投グル小サキ丸ト「ホクロ」狭小ノ地ニ譬フ。

〔肝腦〕 生命ノコト。

〔漸盡灰滅〕 上篇三十四章ニ出フ。

〔南風不競〕 南風トハ南國ノ歌ノ意。昔齊ノ樂官師曠ガ南北ノ歌ヲ歌ヒテ南國ノ不振ヲ知リシ故事ニ起ル。〔終古〕 古ヨリ永久ニノ意。以上第二段。〔鴻號〕 天子ノ名號ヲ云フ。

於彈丸黑子之地、以防四海寇賊者、及三朝五十餘年之久、舉一門之肝腦、而竭諸國家之難、至其漸盡灰滅、而後足利氏始得大成、其志於天下、蓋朝廷不能大任楠氏、而楠氏所以自任、莫以加焉。世之論中興諸將、尙視其資望大小、而不深揆其實、亦與當時之見等耳。不有楠氏、雖有三器將安託焉、以繫四方望哉。笠置夢兆、於是益驗、而南風不競、俱傷共亡、終古莫以恤其勞。悲夫、抑正閏雖殊、卒歸於一、能熙鴻號於無窮、使公有知、亦可以

以上第三段

暝矣。而其大節巍然、與山河竝存、足以維持世道人心於萬古之下。比之姦雄迭起、僅傳數百年者、其得失果何如哉。

低回。居然。值遇。回天日於既墜。復辟。彈

丸黑子之地。南風不競。

〔七〕新田氏

外史氏曰、余見義貞、手記者、蓋其未舉事時、語家子弟武門

〔叡山之事〕 帝叡山ニ在シ尊氏ノ作降ヲ納レタマフ。堀口貞満輩ニ攀チテ諫ム。乃チ義貞ヲシテ太子ヲ奉ジテ越前ニ赴カシメタマフ。

〔按レ兵〕 兵ヲ止メテ發セザルコト。

〔懸軍〕 遠ク軍隊ヲ出スコト。

〔捲レ甲〕 甲ヲ卷キ收メ身輕クスルコト。

〔頓〕 止ムルト調ズ。

〔堅城〕 白旗城ヲサス。

〔主聰〕 天子ノ御耳ヲ謂フ。

〔苟檢〕 下篇一章ニ出ズ。

法戒淺近而已。然有言曰。爲將者。奉上撫下。決志而行。聽運於天。勿尤人也。義貞成於元弘。而敗於延元。亦時運有不可邪。將上之人有負之邪。至叡山之事。可謂負之甚矣。帝蓋前此未曾面議事。至此亦嘗試兩端。僥倖孰成。以是待將帥。惡濟時艱哉。吾嘗咎義貞之東伐。不按兵持重。俟與兵擾其內。而後應之。懸軍長驅。一敗成賊勢。及賊西奔。則不捲甲窮追。頓兵堅城。以致賊再燃。是緩急兩失機也。然當時主聰壅蔽。國論苟檢者如此。蓋雖有善謀。難於輒行。則不可。竄罪其戰也。是故爲官則敗。爲私則成。寧敗而忠義。不成而奸賊。義

〔南遷〕 前ニ尊氏ノ降ヲ納レタマヒシガ後復吉野ニ逃レタマヒシヲ云フ。

〔形〕 露ルト調ズ。

〔款〕 音クワン。好ミヲ結ブコト。

〔授レ鉞〕 討賊ノ詔ヲ受ケシコト。天子ヨリ鉞ヲ授カル支那ノ故事ニヨリテ言フ。

貞之志亦可悲矣。吾居平安。每親東山。岡阜起伏。指義貞力戰處。仰觀叡山。又念其拜辭北行時也。帝及南遷。蓋深悔此舉。下哀痛詔而已。無及矣。噫。君臣際會難矣。可不慨歎歟。假令義貞有霸心。當其初克鎌倉。北條氏餘燼未滅。而足利氏反迹已形。義貞以此爲請。坐鎮舊府。蓄力養威。與護良親王。東西合謀。請清君側。朝廷不敢不聽。使尊氏或挾天子以臨我。其逆節漸長。天子終不能堪。必將引我以自援。猶後白河之近疎。義仲而遠款。賴朝耳。是新田氏上計也。不然。當其始授鉞。進據信濃。上野。連之與羽。俯瞰八州。扼賊之吭。而拊其

〔吭〕 喉ノコト。
 〔拊〕 打ツコト。
 〔形格勢禁〕 行動ノ自由ヲ失フコト、格ハヘダツ、禁ハ止ル意。
 〔自如〕 自若ト同ジ、モトノマヽ、ナルコト。

〔市塵迷離〕 市中ニ塵土ノ立ち迷ヘルコト。

背賊形格勢禁、必不棄我以犯闕。是又其次也。及其辭叡山、則不可爲矣。然得擁太子進退自如、爲赴越前而潛歸上野、勢或可達。收合舊部、奪賊巢窟、據以爲根本。進則成恢復、退則圖翼戴、又可以展其才、而得其志。計不出於此、以無根之兵奔走東西、而謀與戰皆不由己。宜其困屈無所成也。雖然、奉令周旋、銳意勤王、不暇占便利、所以爲義貞也。觀其死時、猶佩錦囊詔書、見其報國之志、百敗不挫。至今凜有生氣、而老賊之骨朽腐已久。十三世之室町、徒見市塵迷離、索其斷礎、不復可識矣。義貞之聽運於天、其以此邪。

懸軍長驅。餘燼未滅。扼吭拊背。授鉞。形格勢禁。

〔八〕 足利氏

外史氏曰、源氏者攘王土、以撲王臣者也。足利氏者奪王土、以役王臣者也。故論足利氏之罪、浮於源氏。而源氏再傳而亡、足利氏乃得延之十三世者、蓋源氏剪除宗族、孤立自斃、而足利氏封建子

〔攘〕 「ヌスム」ト訓ズ、自ラ來レルモノヲ取ルヲ攘ト云フ。
 〔撲〕 引キ込ム意。

〔蝟毛〕「ハリネズミ」ノ毛、多キニダトフ。

〔強驚〕ワルヅヨキコト。

〔桀黠〕音「ケツカツ」ルガシコキコト。

〔牢〕堅キサマ。

〔預〕上篇一五章ニ出ヅ。

〔踞〕音「キヨ」坐ヲ占ムル意。

弟舊臣、足以相維持。故不遽滅焉耳。然其封建也、不知制本末輕重之勢。是以纔能僞定一時、而反者如蝟毛而起。至其中葉以後、天下禽奔獸遁、而不可復制也。夫源氏將士、其強驚桀黠、不減足利氏時也。而奔走馳驅、無一人彎弓東向者、何哉。無他、其力微弱易制、而進退易置之權、常在於我也。至於足利氏、與之以土地之饒、授之以人民之富、其勢足以爲亂。而又襲之子孫、牢不可拔。豈可莫以預防其變哉。然而漫然割與、動使一姓得踞三

〔掉〕振フト調ズ。

〔集〕成ルト調ズ治マル意。

〔逸〕下篇二章ニ出ヅ。

四州、甚者居天下六分之一、而莫之能制。至於其封鎌倉、與室町如二君焉。遂致其子孫猜疑相圖、而終之、鎌倉爲上杉氏所覆、室町爲細川氏所弱。皆所謂尾大不掉、末大必折者也。然其爲之者、有故焉。彼其計奪王家中興之業。故濫賞侈封、務充其欲、不復計其後。以苟取天下。天下已集矣、而不可裁抑。一有所問、裂眦而起。無足怪者。充彼之欲、以濟我之私。彼知我私、而以其功邀於我。我何以制之哉。蓋足利氏、以土地人民、餌天下之豪俊、而

〔擊〕 幸キツクルコト。

〔苟且〕 上篇二九章ニ出
ズ。

〔寧日〕 寧ハ安キ意。

不能掣之。并其餌而失之。亦可哀矣。故彼急於取
天下。而爲苟且攫竊之計者。未有不貽禍於子孫
者。足利氏宗族君臣。更相屠戮。十三世之久。而殆
無寧日者。豈非由其篡奪之報也哉。後之爲人臣
者。亦可以知懼矣。

本末輕重之勢。 蝟毛。 尾犬不掉。 無寧日。

〔九〕 形勢

〔形勢〕 上篇二二章三八
章ニ出ズ。

〔昔在〕 在昔ト同ジ。

〔定鼎〕 都ヲ定ムルコ
ト。鼎ハ夏殷周相傳ヘ
シ實。

〔馴致〕 下篇一章ニ出
ズ。

〔霸〕 幕府ノコト。

外史氏曰。制馭天下。莫善於形勢。苟失形勢。不致
分裂者鮮矣。昔在文武。因山海形便。以分七道。而
王畿居中。桓武定鼎平安。四方環嚮。蓋亦盛矣。然
王政之衰。方隅稍有竊據。不可制者。雖或速就討
滅。而天下之勢。漸趨分裂。以馴致鎌倉之霸。自是
以還。關東形勢雄天下。而京畿莫之能勝。余嘗歷
遊東西。考其山河所起伏。以爲我邦地脈自東北
而來。漸西漸小。譬之人身。陸奧出羽其首也。甲斐
信濃其脊也。關東八州及東北諸國其胸腹。而京

畿其腰臂也。至山陽南海以西，則股耳脛耳。故居其腰臂，可以制其股脛，不可以制其腹脊。且平安四戰之地，天下有事，必先被兵。不如鎌倉之獨以一面西制中原也。至於元弘之時，能一舉取北條氏者，由海內怨畔，禍起其腹心。非能以西勝東也。方其盛時，以鎌倉為根本，而置府於京師筑紫，其制天下，如臂使指。而足利氏反其所為，舍彼居此，謬矣。然亦有不得已也。彼慮於南朝，不能遠居鎌倉。故鎮以子弟，藩屏室町。而適啓爭端，又因其內

〔京師筑紫〕京師ニ南北六波羅府、筑紫ニ鎮西探題府ヲ置キシソ云フ。

〔藩屏〕上篇三二章ニ出ツ。〔内訌〕「ウチワモメ」。

管領持氏將軍義教ニ對シテ不平ヲ抱キ因ツテ執事憲實ト合ハズ憲實ヲ除カントシテ敗亡セシヲ云フ。〔覆之〕關東管領ヲ滅シ、ヲ謂フ。

〔務耕戰〕農耕ト戰爭トヲ務ムルコト。〔龍眼虎視〕龍ノノボリ虎ノ視ルコトニテ勢ノ強キ譬。

訌覆之。而室町遂自是亂矣。是其不能制馭四方，以襲王室之禍者，非失形勢故哉。及其季世，七道豪傑更相吞噬，至元龜天正之間，海內裂為八九。其最大者四氏。曰北條氏。曰武田氏。曰上杉氏。曰毛利氏。毛利氏起於安藝，而并山陽山陰十三州。疆土尤廣。其次為北條氏。北條氏取伊豆據之，遂并關東八州。武田氏起於甲斐，并信濃飛驒駿河上野。上杉氏起於越後，并越中能登加賀，以及莊內會津。皆爭務耕戰，帶甲數萬，積粟如山，龍驤虎

〔角立〕 角ノ如ク並ビ立ツコト。

〔抗衡〕 ハリアアフコト。

〔取夷〕 夷ハ平ノ意。

視、角立東西、莫不有包舉宇內之心。夫北條氏據天下之胸腹、而不能一出其兵、以窺中原者、武田上杉據其脊、以橫塞其衝也。而二氏勢力相敵、相持不決。又不暇圖其西。毛利氏疆土雖廣、以其股脛向其腰臀、固不能抗衡中原也。織田氏介立四氏之中、先其西而後其東、避強擊弱、舍險取夷。是以用力少而成功速。豐臣氏亦因其遺謀、遂得以致合一。織田豐臣之於形勢、如有察焉。而至其所居、與足利氏未嘗有大異同也。其所以既合又裂、

不能久馭天下者、亦出於此邪。

內証。龍驤虎視。中原之鹿。

〔一〇〕 後北條氏

外史氏曰、余聞早雲嘗召儒士、說黃石公三略、其首有言曰、主將之法、務攬英雄之心。早雲聞之曰、止矣、吾既得之矣。不復使說。嗚呼、有以夫。其以流寓漂泊之人、據有八州、以開五世之基也。夫足利

〔早雲〕 初メ伊勢長氏ト稱ス後ニ北條ヲ冒シ、朝變シテ早雲ト號ス。今川氏ノ内亂ヲ治メ功ヲ以テ八幡城ニ居ル後伊豆相模ヲ略定シ子孫關東ニ雄タリ。

〔黃石公三略〕 張良ニ授ケシトイフ兵書ニシテ七書ノ一。

〔攬〕 上篇一五章ニ出

〔五世〕早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直。
〔圖〕「セメグ」ト調ズ、仲悪シキコト。

〔天下之事云々〕早雲兵ヲ舉グルニ際シ衆ニ語リシ言。

〔任〕荷物ノコト。

〔雲蒸龍變〕雲起リ龍之ニ乘リテ天ニ上リ變化ヲ示ス意ニシテ英雄ノ機ニ乗ジテ活躍スルニ譬フ。

〔制其死命〕制其命ト同ジ下篇三章ニ出ズ。

氏隳其綱維。權臣内鬩。海内戰爭。所以然者無他。故焉。天下英雄各以其心爲心。而主將不能收攬之焉耳。早雲蓋早有見於此。以爲天下之事可知已。故仗一劍之任。周流天下。以求用武之地。一得其地。雲蒸龍變。莫之或拒。夫以兩上杉氏百年故家。財賦之富。兵馬之雄。而早雲以赤手圖之。奚異錐鑿山哉。乃能戰勝攻取。制其死命者。果何所持。而然歟。亦以其結納英雄。得其驩心。兵寡而志一。地狹而力合。如同舟濟江。不期而救。以此臨敵。雖

〔勁敵〕豊臣氏ヲサス。
〔左提右挈〕相扶クルコト、挈ハ「タツサフ」意。

横行天下無難。而況於兩上杉氏乎。氏綱氏康所以纒緒業。致强大者。亦由此道也。至於氏政氏直。已代兩上杉。以擅八州之富强。意滿志侈。不復用心於此。上下漸遠。君民不親。欲恃區區之法令。以制馭其下。而不知其下之心既已去之矣。將何恃以抗天下勁敵邪。然豊臣太閤以不世出之略。加之。以我東照公。左提右挈。率天下之猛將精兵。往問其罪。其勢力足以震撼天地。而合圍半歲。纔舉之者。非以其父祖之收攬人心。有固結不可解也。

哉。

雲蒸龍變。不世出。左提右挈。

〔一一〕武田氏上杉氏

外史氏曰、世傳二家兵書、有出後人假託者、不可盡信、特言
 兵於我邦、期乎二公者、不可不知其由也。夫勇悍趨捷、重恥
 輕死、我國俗所自有、我先王又養之以恩、結之以信、所以撫
 摩鍊治之、經數百千年、闔國之民、親其上、死其長、如手足之

〔假託〕カコツタルコト、即チ偽書。

〔趨捷〕音ケウセフ、身輕クスバヤキコト。

〔撰〕「アラキ」生レマ、ノ意。

〔泮〕上篇九章ニ出ズ。〔厲〕音「レイ」トケコト。

〔東伍〕隊ヲ組ムコト。〔結陣〕陣立テヲ曰フ。

〔牙旗〕大將ノ旗ヲ曰フ。〔鼓螺〕大鼓ヤ法螺貝。

扞頭目、以能震懾四鄰、雖魏唐之強大、不能加焉者、恃此俗也。及至通唐氏、乃舍此學、彼斲樸爲文、鏗強爲弱、平時奔競、有急遁逃、幾乎舉朝皆婦人矣。而先王遺民、勇而輕死者、皆爲將門所收、降至戰國、爲群雄所分領、日泮月厲、愈用愈勁。然其撫摩鍊治、教之而後戰者、莫武田上杉過焉。故我邦兵之精、極於此時、而二家又精之精者矣。且源平以還、其兵皆散而自戰、將勇卒銳者勝、非必有東伍結陣坐作進退之法。有之始於二家、二家兵法、傳爲我邦極則者、由此焉爾。二家之陣、大約弓銃手居前、長槍步卒次之、騎士次之、牙旗鼓螺

〔左右拒〕拒者「ク」短ノ意、方陣、左右ノ備ヘヲ曰フ。

〔跳躍〕オドリ出ルコト、盤ハ動ク意。

〔麾下〕「ハタモト」ヲ曰フ。

〔孫武吳起〕支那戰國時代ノ人兵法ノ元祖。

〔比肩接踵〕相次ギテ出ヅル意。

〔形勢機權〕形勢機權ハ上篇三八章權ハ上篇三二章ニ出ヅ。

居中、左右拒夾之、輜重居後、游兵居外、每戰交發、弓銃、長槍從之、士下馬以進、或自卒、傍出、或自中跳盪而出、戰酣、或以麾下乘之、雖變化無準、概以此爲常、一時並同此法、而群雄環視、獨畏二家、幸其噬搏不解、不散觸犯云、夫孫武吳起不同世而生、饒使同世生、借人之兵、以施己之法、不能大展其力、確鬪決勝敗也、今二公挾孫吳之能、擅趙魏之甲、而比肩接踵於一時、可謂希世之遇矣、後之言兵者、觀二公相與之迹、識其形勢機權之大、然後參之其書、辨別真僞、其法可得而詳論。

趨捷 震懾四鄰 日泮月厲 泮厲 孫武吳起

比肩 接踵

〔一二〕 毛利氏

外史氏曰、余安藝人也、俯仰其都邑城池、輒懷毛利氏盛時、每觀嚴島、亦未嘗不想見元就之鏖賊也、夫室町之時、天下紛紛、日事兵爭、如群兒鬪暗中、喧呶毆擊、一仆一起、誰知其曲直、孟子所謂無

〔其都邑〕 廣島ヲサス。

〔紛紛〕 亂ル、サマ。
〔喧呶〕 喧シキコト。
〔孟子云々〕 孟子盡心篇ニ曰ク春秋無義戰。

〔陶賊〕陶晴賢ヲサス。
〔早雲云々〕足利政知ノ
長子茶茶丸父ト繼母ヲ
執ス早雲之ヲ誅ス、堀
越ハ政知ノ居所。

〔牧伯〕諸侯ノコト。

〔名正言從〕名義正シク
言論當ヲ得ルコト。

義戰者、是已。唯元就之於陶賊、與北條早雲之於堀越、羽柴秀吉之於明智、其事皆可稱道。故其功效、皆致如此。而元就最其難者也。夫亂臣賊子、人得討之。然戰國之俗、唯見利而不聞義。如陶賊之事、四隣牧伯、熟視莫敢齟齬。甚至相率歸之、以爲倚賴。獨元就以微力圖誅討、而又請之天子。名正言從、義旗所指、無堅不破。如揭炬暗室、衆目駭觀。足以伸大義於天下、使天下響應歸之。而何十三州之足圖也哉。大凡英雄成事、皆以爲其智略所

致。而其事之合義、有能服人心者、而不自知也。後之追論者、亦徒視其成敗、謂盡成於其智慮、而不知天下之事、有出智慮所不及。況當夫危疑之際、機會之來、間不容髮。苟以區區計算、要之萬全、吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論、不可以揣亂世英雄也。吾論元就、不言其智略、而言其果斷。不言其果斷、而言其事之合義。至於請之天子、又義之大者矣。且觀其效貢賦、助舉朝儀、則存心王室、非一日也。

〔效貢賦〕永祿三年元
就其ノ貢賦ヲ獻ジテ即
位ノ禮ヲ助ケシヲ云
フ。

牧伯。名正言從。響應。

〔一三〕封建

外史氏曰封建之勢始於源氏而成於足利氏足利氏未享其利而不勝其弊織田豐臣承其弊而不知裁之之術蓋皆有待於我德川氏也夫有外諸侯有內功臣內功臣之封不能抗外諸侯然後足以親戴衛護其內而折衝禦侮其外否則功臣亦與諸侯等耳無戴我之心而有爭我之意是織田

〔始於源氏〕 賴朝守護地頭ヲ置キシニ始マ
ル。
〔裁〕 裁チテ程ヨクスルコト。
〔外諸侯〕 外様ヲ謂フ。
〔內功臣〕 譜代ヲ謂フ。

〔犬牙相制〕 領土ノ犬牙ノ如ク入り交リ相牽制スルヲ謂フ。

〔秉〕 「ト」ルレト調ズ。
〔衷〕 音「チウ」中ト同ジ中正ニシテ程ヨキヲ云フ。
〔權〕 度ルコト。
〔勢也〕 自然ノ「ナリユキ」ニテ如何トモシガタキ意。

氏所以被禍也。雖能存外諸侯而不知斷長補短使勢力略敵。又不知大封宗族據其扼塞犬牙相制以鎮壓其邪心。是豐臣氏所以絕嗣也。織田氏唯難於取之故重於分之。豐臣氏唯易於取之故輕於分之。輕之與重之其情雖異其不能收天下英雄之心一耳。故曰二氏承封建之弊而不知裁之之術也。至我德川氏鑑二氏之失而秉其衷矯之以漸權其內外輕重之際以維持於萬世封建之勢於是一定而不可復撼焉。唐柳宗元論封建曰勢也。余曰封建勢也。制勢人也。彼生郡縣之世而揣利弊於千載之上使其目我邦之今日